昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可　昭和卅九年八月一日発行卅九年八月号　（毎月一回一日発行）　創刊大正十三年・通刊四四七号

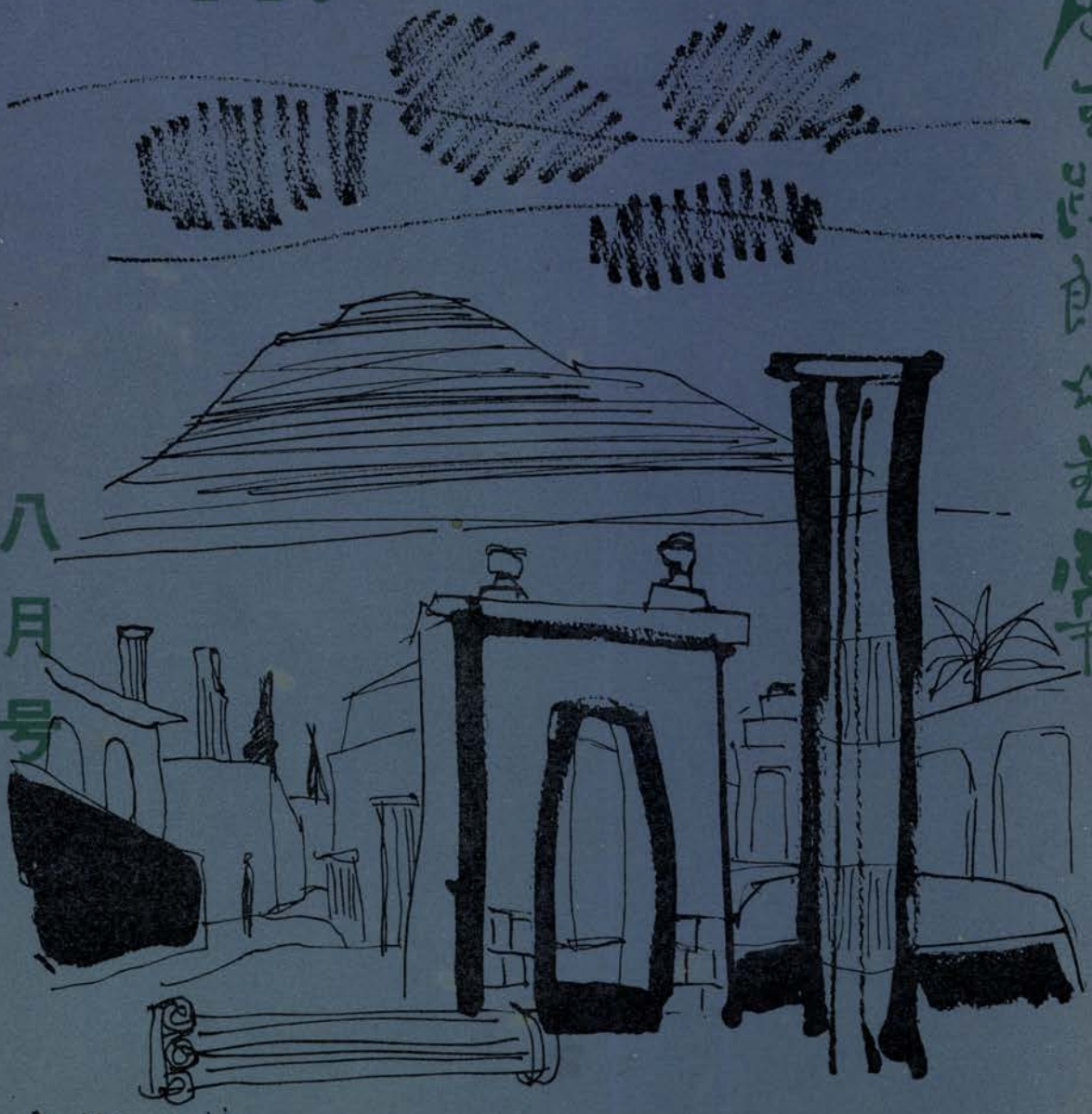
川柳雑誌

Pensoj flugas trans la land – limon

THE SENRYU ZASSHI

No.447

麻生路郎☆主宰



八月号

気軽で！朗らかで！新鮮味ある

川雑 川柳ゆかた会

8月9日（日）午後一時

★恒例の「川雑川柳まつり」は一九六三年度で十年間の予定が終了したので、今夏は昨年の優勝者川雑備前支部（支部長永松東岸氏）の優勝楯返還式と十回中二回優勝された最優勝者川雑篠山支部（支部長小西無鬼氏）の優勝楯永久保持への贈呈式を華華しく挙式する。この光輝ある盛典へ柳縁の人々はどなたでも参列されたい。

日時　8月9日（日）午後一時

会場　大阪府信用金庫会館
大阪市天王寺逢坂上之町五九
（市電天王寺西門電停南西角）
電話大阪七一六局八四八一—二
七七一局九九〇四

司会　西田柳宏子
開会の辞　辻　圭水
挨拶　北川春巣

兼題
「神　経」（二句）　麻生路郎選
「泳　ぐ」（三句）　内藤きさ子選
「　滝　」（三句）　橘高薫風子選
「部分品」（三句）　菊田いさむ選
「隣り」（三句）　早川清生選
出席者も兼題全部・各題句箋別紙・裏面に雅号明記七月末日本社着便のこと

席題　当日　三題発表（各題三句）

呈賞　★各題天地人・各題天位から路郎選により不朽洞賞

余興　落語　林家染丸師
日舞其他　諸家
閉会の辞　樋口舟遊

会費　百五十円

懇親宴　会費八百円（同会場において5時半から7時までの予定）
★投句だけの方は郵券五十円同封（〆切7月末日）
▼夫人同伴歓迎・初心者歓迎▲

大阪市住吉区万代西5丁目25番地　川柳雑誌社
電・大阪（671）6081

一人一冊素晴らしい句を

★路郎好みだけに、すばらしく気がきいています。句会でお使いになるなり、抜けた句の整理にお使いになれば、何冊かで、あなたの句集の礎稿が出来ます。又川柳への贈答に句会の賞品にも最適です。是非ご利用下さい。

一冊八〇円（貴送料四円）

大阪市住吉区万代西五丁目二五
発行所　川柳雑誌社
電話大阪六七一局六〇一八
振替口座大阪七五〇五〇

ハンディな生ビール
アサヒスタイニー

1本 65円

不朽洞句帖

麻生路郎

オリンピックで　下痢気味のジャパン

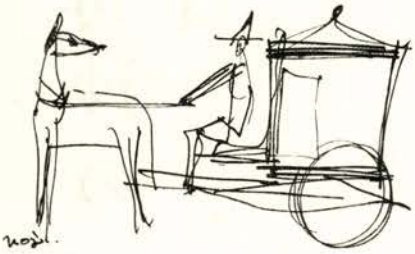
千裂れ千裂れの思想というものを
見送る

彼の死は枯死には少し早かった

肉体から離れる寸前の彼が
貴した言葉

母の路線で
女検事の慟哭

霹靂火の僕に
雨がやみそうだ



川柳雑誌★八月号目次

不朽洞句帖……麻生路郎（3）
題字…麻生路郎・表紙…野尻弘

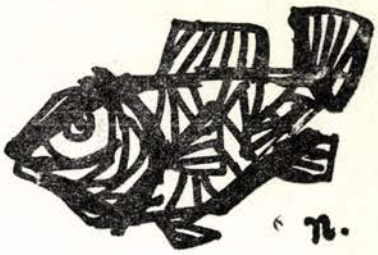
川柳名句抄の鑑賞……麻生路郎（4）
芭蕉ざれ言……東野大八（15）
明治大正柳誌巡礼……奥津啓一朗（36）
川傍柳初編研究（一七）
丸十府・岡田甫
川端柳風・高須啞三味・前田喜代人（12）
岡崎重義・清博美・藤井和雄
柳誌のあり方批判（月評）……長野笛朗（34）
高須啞三味を語る……塚越迷亭（16）
★現代柳人録……（35）

特集「無季俳句をどう思うか」……雨宮八重夫・時実新子・佐藤冬児・石原青竜刀・稲村雀穂・坂根寛哉・小泉十支尾・森下冬青（18）
幽霊の足跡を見に……玉造・阿倍野支部合同吟行（40）
芭蕉庵桃青……冨士野鞍馬（30）
作句の稽古について……川村好郎（28）
大万川柳「仏像」発表……（41）
不朽洞の人々……一栄さんの巻（39）

★

川柳塔……麻生路郎選（6）
同舟近詠……諸家（29）
近作柳樽……麻生路郎選（24）
人生譜……北川春巣選（32）
金泥集……河野春三選（35）
各地柳壇……麻生葭乃選（42）
★柳界展望……（38）……不朽洞会から……（39）
「階級」……若本多久志選
一路集「頬ずり」……長野文庫選（36）
「禁酒」……本多柳志選

★柳構室……路郎生（46）



川柳 名句抄の鑑賞

麻生路郎

〔六五〕

創業二百年三児みな継がず

（喜　夫）

創業二百年の老舗を、世襲だなんて、そんな封建制をと、三児が三児とも問題にしないのである。父は暗い顔をしたまま死んでいった。母の手ではどうにもならない。二百年の創業はビールの泡のように消えさった。長男は画家になった。長女は歌手になった。二男は山に魅せられて、未だにフラフラしている。所うした世相を巧みにつかんでいる。

〔六六〕

雨洩りのにくたらしくもリズミカル

（恵二朗）

雨洩りというものはいかにも貧乏らしい感じがしてイヤなものだ。

部屋は薄暗くて、何んとなく心が沈みがちになるものだ。ソコへ、ポツリポツリと来るのだから、全くやりきれない。ところが、この句の作者はそのポツリポツリがリズミカルなので、憎たらしくなったという繊細な神経の持ち主である。この心理状態には共感される人たちも少なくないであろう。

〔六七〕

博物館我一人ゆく下駄の音

（堰　子）

催し物のない時の博物館ぐらい静かで物淋びしいところはない。誰一人来観者が来ていない。見張る人も、椅子にもたれて居眠っているようである。まるで死の建物の観がある。

所うした博物館へ行こうものなら、自分一人の下駄の音が異様にカン高く聞えて、背後から誰かがやって来るように思えて無気味なものである。「我一人ゆく」で情景をホーフツとさせるところ巧みな描写である。

〔六八〕

宗門の会議眼鏡の僧並ぶ

（清　生）

戦後の日本は、会議の日本だ。何処へ行っても会議会議だ。立派な建物があっても会議は温泉でするのが常識のように流行している。異議なし、異議なしで早く済むのと、あとの宴会が物をいうからであろう。

この句は宗門の会議から、僧という僧がいずれも眼鏡を掛けているという異風景を発見しているところの軽い穿ちにある。さすがにこの会議は温泉会議ではなく、奥まった薄ぐらい寺院の大広間で、居並らぶ僧侶の眼鏡のギラギラ光っている無気味さを詠んだものであろう。

〔六九〕

平和なるかな石に値がつき

（後　江）

近ごろ石の愛好者がグングン殖えているようだ。石は黙して語らないが、人は石によって心のあたたまるものを与えられ、深く人生を悟らされるからであろう。石に値がつくのも、世の中が平和であるからだと、平和を讃美した面白いネライの句だ。

この句は七七の短句で、きびきびとした表現であり、倒置法によって更に句意を強めている。

〔七〇〕

金借りに蛙のごとく手をつかえ

（蕉風子）

自嘲句であろう。金を借りに行った。何んとしてでも借りて来ねばの潜在意識がそうさせたのであろうか。フト気ずいたら蛙のように手をつかえていたというのである。

比喩の面白さである。句の仕立方から言えばユーモアの句だが、しかし笑えない面白さである。

〔七一〕

ふたりともパジャマステレオ昼を鳴る

（八九寸）

映画なら昼の情事というところか。「ふたりともパジャマの措字に艶っぽい情景が眼に迫まるではないか。言うまでもないが、彼氏彼女は夫婦ではない。淡々と投げ出したように詠んではあるが巧みな写生句だ。

〔七二〕

たかが市議なにしにドルをまきにゆき

（宗太郎）

たかが市議ではないか。外語一つ談せないくせに、何をしに外遊するのだとは、市議にとって、これぐらい痛いきつ間はないであろう。しかしこの侮辱的な「たかが市議」の上五の措字の威力も馬の耳に念仏ほどの効果のない市議が多いのである。

赤ケット市議に、公金をムザムザ使われ

ることの公憤をブッつけに詠んだのが、この句のヤマである。

〔七三〕

船乗りの給料だけをうらやまれ

（愛　鳩）

セイラーと言えば家や家族はあっても年中お留守だ。あっちの港から、こっちの港へと渡りあるいている。世の女たちから言えば想像しても心寒むざむとするものがあるらしい。しかし、サラリーばかりは陸で働いているものとは比較にならない高額だ。そこをズバリと詠んだ句で、「給料だけをうらやまれ」の給料だけが実によく利いていると思う。

〔七四〕

男嫌いあんたも本気にしていたの

（秋　星）

「君は男嫌いだと言われていたので、ボクがプロポーズしても、おそらくダメだろうとずい分ながく躊躇したものだよ」

「アラ、あんたもワタシの男嫌いを本気にしていたの」

「モッパラ評判だったよ」

「群がって来る銀蠅どもがうるさいから、そういってたのよ」

「オヤオヤ、銀蠅か」

「ワタシはネ、遠うの昔に、あんたにメッコを入れていたんだもの」

「それにしては随分じらされたものだなア」

「男って、すぐつけあがるからさ。」

斯うした二人を話し言葉で巧みに詠みこなしている。

〔七五〕

アイロンがきけばかけたい顔となり

（一　星）

トシは争えない。トシと共に殖えてゆく顔の皺が、それを実証してくれる。

アイロンがきくものだったら、かけても見たいと思うのも笑えない人間の弱さだ。

〔七六〕

まのびした顔へ集金また来ます

（千　容）

ベルが鳴った。集金らしい人がやって来て顔をのぞかせた。誰も居ないので、隠居が自ら出た。

「お留守ですか。」と集金人がいう。

「家内は留守だよ」

「では、また来ます」と集金人はアッサリ引きあげた。まのびした顔では話にならぬと思ったのであろう。

この句は作者の実感を詠んだのであろう。筆者なども、レッキとした主人なのに集金人はもう相手にしてくれない。いきなりお留守ですかと言われる。こちらも面倒くさいので、おお留守だよと言ってしまう。筆者ももうまのびした顔の仲間に入れられているのである。まのびした顔へがよく全貌を描き出しいる。

〔七七〕

法話集読んでて背鰐まだほしく

（阿　茶）

背鰐のハンドバックやパースを欲しがるところから類推して、法話集を読んでいる主は老年の女性であろう。法話集を読むぐらいだから、もう見栄も外聞もないかというと、そこは女性で、いくら齢をとっても、多少の色気と見栄は捨て切れないのだ。そうした女性心理へメスを当てたのがこの句。

〔七八〕

体まで張るではないと貸すつもり

（光　郎）

夫が長病いで、家計は底をついている。子どもは小さいし、内職ぐらいではどうにもならない。そこで素人でもよいからという世話してくださる人があるので通いの仲居をしようかと思って居りますがどんなものでしょうかと相談されたのであろう。

どうせ衣裳の持ち合せもない安仲居では、からだを張ることも承知しなければ勤まるまいとの話。その店の評判もよくないので、亭主持ちだけに踏み切りかねていると相談に来られたので、「体まで張るではないと」当分の入用を貸してやるつもりになったというのである。そのうちに夫の病気も軽快になろうし、なんとかいい智慧も出るだろうという一篇の哀詩である。貸すつもりの人がどんな人であるかが、この句ではハッキリしないが後難のおそれのない善意の人であることがのぞましい。

〔七九〕

げんげ摘む妻にもあった娘の姿態

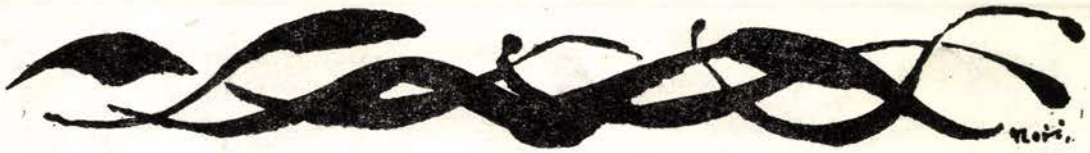
（栞）

春の土堤に出た時、妻は急に明るい顔をして、

「アラ、こんなところにげんげが咲いているわ、可愛いのネ」

と、腰を折って、げんげを摘む姿態を見て、夫はハッとしたのであった。それはもう中年過ぎた妻の姿態に、いかにも娘らしいシナを見せられたからである。妻にも娘らしいシナがあったのかなアと、若い頃の妻を偲んだというのである。中年以上の夫婦を詠んだ句として面白い。

パーティーや来客のおもてなしにも
絶好の話題の生ビール……
サッポロジャイアンツ
★サッポロビール株式会社



川柳塔

麻生路郎選

大阪市　市場没食子

飛び休も出ぎらいの父書斉に居
デートがあるので超勤したがらず
大阪に病魔が見切りつけさせた

西宮市　若本多久志

鈍行でしみ〴〵とした旅の味
もうとうに死にゃはりましたとケロリ云い
社長から「犬の子やろう」に恐縮し

大阪市　正本水客

宮島にて

回廊の波あげ潮の音もせず

秋芳洞

鐘乳石太古のはだにふれる色

鳥取砂丘

どこまで行っても影のない砂が鳴る

高槻市　若柳潮花

待つひとが居るから燭冷もろて去に
恋の血もさわがず日々の舞い扇

逃げるだけ逃げのびてから嫁き遅れ
盛りあがるビールの泡も夏のもの
灯を消した窓急行の灯が走る
気がつけば汚職の渦のなかにいた

兵庫県　小西無鬼

貸切になればたばこも喫わすバス
天　平等如露も及ばぬ雨を撤き
御招待やっぱり祝儀要るのなり

大阪府　西いわを

不断着のまゝ調停の内くゞる
愚痴一つ云はない妻を哀れがり

大阪市　北川春巣

灰皿の掃除こまめにして雨読
飛行機族は東京の近さ云う
善意銀行へ眼も預け血も預け
子の大学へ招かれて老いを知り
下請けという名淋しく残業し

備前支部創立十五周年大会出席

「古くとも」の句碑十五年苔が生え

鳥ケ辻句会新奥和歌浦吟行

新奥和歌みんな急がぬ人になり

ハワイ　羽佐間柳葉

盃の数が言わする肚の底
額の位置人の気性を見せて吊り
率直が過ぎて社長の忌避に触れ

堺市　吉田圭井堂

このかつら悲哀を秘めてまた借られ
只派手にやりたいだけの共稼ぎ

防府市　長野井蛙

そっとしておやりと同じ過去を持ち
お座なりの言葉で今の子騙されず

岡山県　直原七面山

戦争を生きぬいて来てフグで逝き
腹の底も上げ底だったのにあきれ
醜男でよし太陽のような愛
甘やかす躾けが祖母のカンにふれ
犬にはあらねど吠えてみたき日

鳥取市　河村日満

悼耕民氏

ふりきって出た事にするひとり旅
百万円の訴訟仏の知らぬこと

月遅れにしては読みきる主婦の友
税金払うのにペコペコすな市民
大阪市　足立春雄

古池に波を立てずに後もどり
情熱の滑稽かきたて、転任し
子供の日だけは作った福祉国
倉敷市　木村千容

観光がおいらくのしわ撮りにより
救ライの父春霞の中へ昇天す
お手盛をつきあげられて腰くだけ
アノヨから新居の夜を見ておわす
倉敷市　田垣方大

足袋はだし処女を守った息づかい
嬉しいわ嬉しいわと買わせとり
ライターが左右から出る実力者
京都行

凡人とはっきり悟る竜安寺
苔寺で金が出来たらなと思い
加賀市　野村味平

釣銭を忘れるほどに喋りすぎ
沖縄を還えせと声はかれたけど
デイトする車のほしい若さなり
窓口も白百合に変るむし暑さ

こりごりの株やけれどと相場欄
掃除器をきらう明治の草箒
大阪市　木村水洞

総裁の椅子を争う金と金
くだ巻かぬだけがとり柄と子に云われ
慾すててから食慾がすこし増し
米子市　小西雄々

プライドがあり上品に西瓜食う
文学の疲れを語るゴルフ場
太陽の季節へ若さが爆発し
大阪市　山川阿茶

宝石が女心を曇らせる
PTA私もダイヤ
抽せんの団地家相を云うとれず
加賀市　那谷光郎

口にガム眼にエロ雑誌夜を更かし
焼香へ勲章も序におがまされ
もう慣れて見出しですます事故の記事
大阪市　福井野迷路

吐き棄てたガムが確かりしがみつく
でも俺に無尽蔵の空気あり
下関市　桜川不水

悪友が笑い掛けてる写真帳

郵便がわが家へ向けて曲って来
年金を受取る判もちびている
晴耕雨読へ雨の日がなし
通帖の現在高へ眼鏡拭く
出雲市　尼　緑之助

赤ン坊の笑顔短気を見上げてい
夜行バス峠の蕎麦に息を入れ
酒にくからず老いのきびしさを知る酒の
観光船養殖真珠の邪魔をする
秋芳洞にて

人間のにおい神秘をかき乱し
大阪市　水谷竹荘

婚約が出来て多忙な母になり
婚約にてれる息子をはがゆがり
不渡りを出しても二号持っている
京都市　大鶴喜由

心呉れたのに体まだ呉れず
居酒屋の前でおもちゃに気がかわり
鈍な囚児の泣き声がまだ解けず
呉市　林野甦光

いたづらをしたとおでこが物語り
ハイヤーが止まった内の客でなし
岡山県　浜田久米雄

適当にみんな彼女をつれあるき
岡山市　服部十九平

勲章を吊って猥談に耽り
くじ運のよい子に福引券をやり
岡山県　大森娯句楽

自覚症無いのを良いにしては呑み
倒産を知らず暗金融は割り
西宮市　若林草右

ビルの谷間老舗蠟のように生き
裏口の下駄は桂馬にぬぎすてる
分譲地五丁の坂は書いてなし
出目金は別に泳いだ金魚釣
岡山県　田村藤波

動物園でおなじ気分になる親父
さんさんと降る陽光の下の釣り
児島市　本田恵二朗

悪友の奇襲に動じぬのも内助
万世一系科学者の血もまじり
謹厳な顔で居眠る芸を持ち
桃太郎が眠りこけてる乳母車
京都市　松川杜的

パチンコに負けた印象の旅の町
五十未だ巻尺とスパナの要る仕事

知らぬ間に我が家にもあり左派と右派
新幹線試乗

三人掛の中の座席にちと困り
堺市　高崎雄声

中之島のつとめBG誇にし
饗応か大根足を見せつける
昔は軍靴今BGの靴の音
手も脛も出して達者な女の子
島根県　藤井明朗

ふる里のちまき他人はまずく食べ
乗換の駅から二人坐らせず
タワーから人の生活が蟻に見え
娘が嫁ってからも帰えりを待つ日あり
倉敷市　野田素身郎

ノーアウト満塁なのに客が来て
ゆっくりと明日定年の椅子を立ち
髪染めて二度の勤めの朝を出る
尼崎市　坂田東洋男

末っ子がまた新造語覚えて来
ガラ〈ガッチャンごんた一番先に逃げ
金貯めて医者との縁が深くなり
芦屋市　丸川初甫

大覚寺花展より

琴の音が池にこぼれて覗き込み
君子蘭の赤さをほめて腕を見ず
晩春を惜しみカメラを右左
シャボテンの個性いささか吾れに似て
溶岩も大正昭和の時差を持ち
土産より重い溶岩提げ歩き
唐津市　新岡回天子

電車賃もないに自家用多すぎる
長い事無沙汰をしても叱られる
岡山県　池田古心

Y談の土工女は負けていず
老人会這入れと気まで老いらす気
大阪府　早川清生

団地っ子土地っ子PTAの溝
肩で風切る巡査のさとは獲れぬ浜
東京にて

上京の第一印象美人いず
堺市　辻圭水

報告書麻雀してたと書いてなし
心ない一言でノイローゼにされ
総社市　野々口美舟

母と名が変りがめつい顔になり
曲折もあり結ばれて笑い声

派手好とみられ未だに一人住む
下関市　中村九呂平

鏡台に写る娘亡妻に見せたい日
銀行かそうかとそっけない返事
見返えしてやる気か煙草までやめる
鳥取県　田中蛙眠子

蒲郡市にて
竹島へ渡り終った旅疲れ

三谷温泉にて
三谷の夜の情事を弘法許し給う
神戸市　仲どんたく

会社慰安会
慰安会何時もと別の顔で出る

水平寺にて
学僧の眉秀でたり初夏の寺
平田市　久家代仕男

値次第で農地売る気の世嗣ふえ
物忘れ年を意識の目をつむり
蚤一つ押えるにさえ後手を踏み
大阪市　本多柳志

旧婚の二人へ旅の傘一つ
ファスナーへ句帖もつめた旅鞄
大阪をはなれたらしい青い空
二人して読めない駅も旅心地

五月富士清水港は茶がかおり
丁寧に拝んで寺の名も知らず
出雲市　原独仙

逢引きを蛙ゲラ〳〵笑うよう
健康に朝露踏めと言うけれど
打ち水をした後にくる俄か雨
縁日に昔の人も孫を連れ
西宮市　野呂鵜汀

どんぞこに居て茶柱を喜こべず
借家なり柱へ釘を打ちにけり
最終が過ぎて寝ついだガード下
新潟県　高野不二

御巡幸を迎えて
天皇へカメラを向けただけで過ぎ
ヌードべたべた貼って若さの匂う部屋
下っぱはこうもうるさいやきとり屋
大阪市　石倉旅風

鐘撞けば妻も昔を想い出し
老夫婦帰帆の見える磯に佇つ
一本のマッチで二人喫える風
人間を取り戻しスター離婚する
大阪市　魚住満潮

続・西成界わい

猟銃がビルの窓から覗く世だ
死に病いまだ臍繰りに手を付けず
男親子の盗癖を耳にする
スモッグの中でデイトの日を約す
千円札女が横で臥て呉れる
愛媛県　村上旭童

いつ降るかわからぬ雨をまつ田植
母ちゃんは秀才だった叱りよう
折伏へついにおこった声になり
高槻市　磅島静馬

手紙一とつ開ける鍵を探させる
云い出した父だけ体操やめられず
最高の準備へ代理で物足らず
能筆だけでは代書屋にもなれず
盤石と信じた会社身売りされ
大阪市　河井庸佑

言いたい事云うてさっさと席をけり
フラッシュをあびて結ばれもう別れ
通知票のない世界が羨まし
懇談会気の毒な程小そうなり
すじ書きがあるように打つホームラン
入場料かえしてほしい試合見せ

大阪府　谷沢好祐

高校生ストこっちは髪の長短で
プロ野球にまで舶来がどっと殖え
ひとのふり見てから労資妥結する

愛媛県　槇　柴光

団体でならと娘を山へやり
月給になってチョイチョイ休みだし
戦友会元班長が酌ぎまわり

青森市　工藤甲吉

何か書く女性の手帳小さかりき
エライ人の後を金魚の糞みたい
落選のそれ以後口端にものらず
金も名もいらず釣竿かついで出

松江市　小林孤呂二

親切にほだされ降りだしたのも知らず
兆候へ男の子をと願うのみ
小役人の分際と思われたくなし一級酒

豊中市　林　夢虹

桜桃忌死は恋愛の果実なのか
許されぬ恋よまぶた閉じれば
皮肉かい遠慮をせずに云ってくれ
別れろと書いてる相談欄をほめ

大阪市　今西章雅

辞めるなら今だ夫は高いびき

京都市　室井八九寸

ただはずかしうお見合い批把をむく
湯を沸かす竈も拝観大徳寺
撮ってるのを撮る新緑金閣寺

岡山県　横山一声

月賦で買うて定価をよう知らず
見放なされてする退院とは知らず
捨て作りにしたとは云わず不作です

小松市　関戸宗太郎

国会議員みたいな下品な野次が飛び
スト妥協とたんに社長さんと呼び
アベックの離婚しそうなのがおらず
ダム底へ沈む故郷へ借りにゆき

美祢市　安平次弘道

刑事よりも仲間の恐さに割らぬ口
ホタル籠農薬のがれたのが光り
海女の腰をストリップの眼で眺め
リベートに教師集金までもやり
事故よりも浮気が知れるのを恐れ
飲み仲間「どうも」「どうも」で意が通じ
冠水三度やっと予算化する役所

愛媛県　渡辺暁童

カラーフィルムみたいな女がちょうりようし
薩長土肥の薩の女もアイシャドー
桜島やらずの雨が火山灰
清正は一代でなく生きていた
今や詮なき停年のわく

学力テスト

言うことはあるなと思い採点し

宇部市　平田実男

意地で産んだ子が再婚の邪魔になり
嫁きおくれコケシも疲れた顔になり
学歴を年季で使う気が疲れ

諫早市　川岡霊眼子

横綱の一度負ければ未だ若い
勝負が定まってライバルの顔まで見
小粒ほど獅子奮迅の髷が揺れ
初合せ新参勝って御辞儀をし

岸和田市　内藤きさ子

釘一つ抜くにも女コツが無し
虚無僧を少し急がす春の雨
干し傘にアクセサリーの雨蛙
やわらかい人と一夜を語りたし
三原山召しませ馬の尾がゆれる
御神火へあんこ絣のまゝで老け

青森県　木村涼人

性慾の事には流石女医触れず
土方でもするかと妻におどかされ
閑古鳥詩情どころでない農夫

芦屋市　唐崎専翁

足腰をせめて延ばそと海の外
海外で唖の賢しこさ覚って来
芦屋ぼけへ欧州呆けをプラスして
何処へ行っても金のなる木は見つからぬ
スリの眼は高いワテらを狙わない
費うだけ使うたらコッソリ舞い戻り

倉吉市　奥谷弘朗

それぞれのチマキの型にある家風
ミロのビーナス家の女房で我慢する
本当に私でいいのと妻哀れ

兵庫県　遠山可住

幸福がやせさえすれば来るように
スタイルがいのち子供をよう産まず
決心がついて拝啓市長様

兵庫県　河原みのる

牛でさえ田を鋤こなどと思とらず
死んでからなにが欲しかろ勲八等

ローカル線にて

米袋僕にしなだれかかって来

姫路市　隠岐不酔

五十円と言うたら海女め又潜り
連休のプラン苦しい予算くみ

大阪市　伊集院良

猫の額程のたんぼにも案山子
台風と雀が農夫休ませず
借銭の話が途切れる停留所

鳥取県　清水一保

今更に出世も出来ず子を頼り
男女平等唱えた娘にも酌をされ

出雲市　中川晃男

慰安旅行景色へ一々声を揚げ
失恋が今日の私にしてくれた
下宿代払わず内閣こきおろし

京都市　都倉求女

買い換えたすだれを風も知っている
半分は嘘を承知の立話
水撒けば初夏の息吹きがはねかえり
ビルビルビルああ夕立に軒がなし

兵庫県　大江秋月

駅長がかわり花壇も色をそえ
たばことめられて病床でそと居る

親切な車掌でしたと母帰る
いともきれいに掃除して押す盲目判

大阪府　松田半月

スリの手あれこれテレビ恐くなり

今治市　越智一水

十六の恋蜜豆でよく喋り
水番へあまりに月がきれい過ぎ
駅の名を読ませて子との旅楽のし
三号の宅では社長も水をまき

竹原市　山内静水

口を開けさせてキャラメル入れてくれ
太陽の屈かぬ竿に妻のもの

大阪市　森川すみれ

空白の日記は苦悩秘めてをり

笠岡市　高木桃里

朝雲に思いが残る宿を発ち
汁粉屋で心がとけて行くデート
添わされぬ恋が気になる波の音

新居浜市　小林孝正

老いらくへせめて蒲団の派手を着る
画架提げて娘見合へ振り向かず
税務署が帰って窓の風を知り
それとなく母が見てくる売場の娘

川傍柳初篇研究（一七）

丸十府　高須啞三味
岡田甫　前田喜代人
○　岡崎重義
川端柳風　清博美
藤井和雄

193　**深窓に十有九年やしなわれ**　　眠弧

藤井＝昔は、娘の十九歳は大厄、大不吉の歳とされ「箱入りを十九で桶に入れかえる」で、十九歳で娘に死なれたという古川柳は、非常に多い。

薄墨で昨十九日娘こと　（タル二二）

高須＝「川傍柳」五30にも「深窓に養いすごし四火をすえ」という句がある。全く同想で、家の卑ふかく、大切に育てる、という意味で「深窓」などという言葉を使ったので、十九年間大切に養い育てた、という句である。

清＝女の大厄の十九歳の句だが、

ほめられて此世にたった十九年　（タル二〇）

で、十九歳で死んだ、ということを言っていることを、重要視したい。

丸＝賛。

岡田＝同。

194　**いそぐ旅六文ぬいて待て居る**　　眠弧

藤井＝川崎の六郷の渡しは、渡し賃六文であったが、六郷の渡しで「急ぐ旅」といえば、松ヵ岡行きの女であろう。心せくままに、六文ぬいて、しっかと手に持って、川崎側へ舟の着くのを「待っている」ところである。

舟賃を六文出してお秋こし

（お秋は、亭主にあきた女の擬人名）という類句もある。この「六文ぬいて」というのは、銭ザシ（ワラを細くなって、銭の穴にさして、束ねたもの）から、銭を六文ぬいて、ということである。

高須＝礎稿通りと思う。

六郷をしずかに越える三年目　（傍五）

の逆で、行く時は「六文ぬいて待つ」ほどあわてて越した六郷だが……。

前田＝このサシは、百文束ねてあった。それから六文ぬくと、九十四文になるが、この九十四文は、大井川渡りの肩車の最高賃であった。「急ぐ旅」必ずしも松ヵ岡行きとは限るまい。私は、大井川越えの句と思う。「急ぐ・抜いて・待って」から、このような感じを受けるが、いかが？

岡崎＝前田説も面白いが、やはり「急ぐ旅」にこだわって、礎稿に賛。

清＝六郷に賛。六文ばかりでなく、汗もにぎっていたことであろう。但し、六郷の渡し賃が、はたして六文であったか、どうかは疑問。六郷にかけて、六文と言ったのではないか？　古川柳作家は、よくそういうことをやったので……。

丸＝同。六郷の渡し賃が、六文であったかどうか、はっきりしないが、「紫の一本」には三文渡し（霊岸島から向島への渡しがあり、東海道の小天竜、大天竜の舟渡しは武士は無料、商人・百姓は六文（東海道名所記）とあり、所により時代によって差があったらしい。この六文が、六郷のきかせであったことは、間違いない。

岡田＝最近出た「ずいひつ縁切寺」の巻末の方に、六郷の渡し賃十四文と書いてあるので、著者（もと鎌倉駅長の田中彦十郎氏）にただしたところ、文化年間には十文の記録がある。とのことであった。

あい十銭という所へ追手なり　（藐5）

からしても「川傍柳」の時代には、六郷の渡しは、十文であったと思われる。この句の「六文」が、六郷の暗示説は、小生も一応肯定するが、大井川の句を読んでみると、前田氏の大井川十四文が間違いでないことが判り、大井川説に賛成する。

195　**古歌を百よんで仕廻ふと疊ミ也**　　秋紅

藤井＝百人一首のカルタ合戦がすんだ後の「引き算の答」のような句で、気のきいたつもりのつまらぬ句。

高須＝百人首競技に熱中した後のむなしさ……と言うか、みな上気した顔で、何かホッと一いきついている感じが「あとは畳だけ」だという表現に、よく出ていて、ボクは好ましく思う。あながち「引き算の答え」だけの感じではない。

前田＝「たたみ也」は、読み札を百よんでしまったので、畳の上の取り札がなくなり、畳が現われた状態を言ったのであろうが、わざとらしくて頂けない。なお、札を全部「たたみこむ、しまう」にとることも出来るが、それだと「たたむ也」が普通だと思うので、それはとれない。

丸＝賛。

岡田＝諸説に尽きる。現作家の高須君は好もしいと言っているが、作意がすぎて、感心できない。

高須＝この研究は、解釈で、鑑賞ではないのだから、あえて主張はしないが、古川柳特有の妙にキザな所のないのが、ボクは好きである。

古歌を百読んでしまった畳を見
とでもすれば、すっかり現代式で、ボクが選者でも上位に抜く。

196 **こも僧に出ぬ日は乳をもらふ也**
鼠弓

藤井＝子持ちの虚無僧、仇を追う身かも知れないが、天気の時は他人に預けて仕事をする。しかし、雨の日はあぶれるので、赤子を抱いて、近所へ乳をもらいに出かけなければならない。親も子もあわれである。

川端＝普化宗の僧侶でよいと思う。

高須＝ただの普化僧では「乳もらい」はしない。子持ちの虚無僧というのだから、やはり何かあろう。天気の日は尺八を吹いて町へ出る。だから「出ない日」は、収入もないので「乳もらい」に出るので、女敵討ちか？

岡崎＝この子持ちは、女房に逃げられた武士。虚無僧に身をやつして、姦夫姦婦をさがしもとめる女敵討ちであるが、赤子を残されているので、乳もらいもしなければならないのである。

丸＝同。「乳もらいに顔のよごれた男来る」（37ウ）と同想。但し、あえて女敵討ちとは限らぬと思う。

岡田＝乳呑み子を残されて、女房に逃げられた男だから、これは女敵討ちの虚無僧に相違ない。

197 **抱留たので十分一をもらい**
泉河

藤井＝「抱き留めた」のは、恋人と一緒になれないのをはかなんで、身を投げようとした娘を、抱き留めてである。そして、改めて仲人となって、持参金の十分の一をもらったと、いう句で、

年をまで一割ひいて世話をやき
（タル二〇）

十分の一とるにおろかな舌はなし
（タル一）

でも分かる通り、仲人礼は十分の一が相場だったから、例の百両のお金の場合、十両の礼金とんだ顔の嫁
（傍二）

なんて句もある。

清＝「十分一」は礎稿通り「仲人礼」であるが、これは持参金の一割で、抱き留めた」という表現は、その醜娘を、貰う相手に承知させた、という意があると思う。

丸＝この句は、浅野長矩が殿中刃傷のとき、それを抱き留めた梶川与三兵衛が、五百石の加増をもらった（浅野は五万石ゆえ百分の一だが）ことを詠んだもので、場所がらでとりさい人も五百石（47ウ）の類句もある。

岡田＝丸先生説通り、浅野殿中刃傷に関する句であるが、それに仲人礼の十分の一を、ちょっぴり利かせてあるものと思う。

高須＝後で、柳雨翁も「梶川の句」と言っているのを知り、判ったような句でもいろいろ調べるべきだと感じた。

198 **今に降るぞへと鑓うり値切られる**
閑々

藤井＝五月節句用のオモチャの「ヤリ売り」である。

216 槍うりの頬りに通る時あがり（13オ）

のように、天候の定まらない頃なので、「今に降るぞ」と言って「値切られて」いる句で、季節物は買い手も心得ている。

川端＝雨が降り出すと、売って歩けないばかりでなく、子供が外で遊べなくなるから、商品価値がなくなる、そういって値切っているのである。

高須＝五月節句ではなく、大森へ来た遊山客（または参詣人）が、路傍の露店で売っている、大森土産のムギワラ槍を、そう言って値切っている、のではないか。

前田＝礎稿に賛。

槍うりは微塵さと言うあやめ売り
（タル九）

という類句もある。

丸＝賛。

岡田＝同。――高須兄よ、大森のムギワラ細工店は、露店ではなく、ちゃんとした土産物店であった。（東海道名所図会）

199 **蝿の生捕捨所にこまってる**
鯉丈

藤井＝ありそうな事。ひまなとき鼻毛を抜いて、処置に困る事がある。自分の部屋ならともかく、人の家に行って、つい日常の癖で、手取りにしたハエの、捨て所に困るのは、あたりまえ。

川端＝片手か両手かで、ハエを生捕ってはみたが、潰すには汚いし、捨てる場所はなし、ホトホト困っているのである。

高須＝訪ねて行った家で、待たされている退屈まぎれ、目の前に出ている茶菓子に来たハエを、ヒョイと手捕りにしたが、さてその処置に困っている男の様子が、目に見えるようで、おかしい。表現は上手ではないが、平明なよい句である。

前田＝何でもない句であるが、下の「捨所に困ってる」が、いろいろの情景を思い出させて、面白い。

蠅は逃げたのに静かに手を開き
（タル一六）

丸＝賛。

岡田＝同。なお、小生の岩波本では、出版社の要請で、読みにくい字へルビをつけたが、原本には大体フリガナはついていない。この「捨所」にも、一応「すてどこ」としたが「すてど」と読んでもさしつかえ

ないと思う。誤解のないよう、この際、一言おことわりしておく。

200 **四位と大夫の間を行面白さ**　一　甫

藤井＝「間を行」は「あいをゆく」と読む。「大夫」とは周の官名で「士の上にして卿の下」わが国では五位の通称。四位からは昇殿を許されたから、四位は殿前の勅任官である。

また「大夫」は遊女の最高位で、遊客からみれば、大夫の部屋に昇殿を許されるのは、三会目からで、初会や再会のころ、その夢をもって遊んだ面白さ、士・大夫・郷・公と昔の身分階位にたとえて言った、ものではあるまいか。

川端＝「川柳大辞典」には「上って大夫となり、劣れるは下ってはしとなる。中央は格子なり……」とあるから、格子越しに、ひやかして歩くのが面白い、というのではないか？

高須＝両説とも面白いが、どうも決定的なものを感じない。句面の通り、動めも士大夫の間ぐらいが、気楽で、面白い、というだけではないか？　徹底したサラリーマン根性である。

丸＝四位は椎（頼政の〝椎を拾いて世を渡るかな〟の詠歌で、三位に叙せられた、という故事を念頭においたもの）大夫は松（既迷の秦の始皇が雨宿りした松に贈位した故事から）と言えば、もう説明の要はない。既出の嬉の森の椎の大木と、その対岸の首尾の松で、その間を猪牙にゆられて、一路吉原に行く遊客心理を詠ったもの。

岡田＝丸先生正解。この句は、吉原に遊んだ江戸ッ子には、直ぐ判る句なのだが、時代のずれで難解句になってしまった。

（12ウ）

201 **岡場所ハこれがいやだとうろたへる**　一　甫

瀧井＝吉原は官許だからないが、岡場所には時々警動（臨検）があった。

湯気のたつへのこでけいどうろたえる　（末三）

吉原の常連が、河岸をかえて遊んで、警動をくらい「岡場所はこれがいやだ」は、ごもっともな話。殿前の新聞（主に地方紙だが）には、つかまった客の名前が出たもので、臨検の警官は無断で各室の唐紙をガラリとあけたものだという。

川端＝岡場所とは松ヵ岡ではないか？三年間の尼（有髪ではあるが）生活がいやだ、という句と思う。

高須＝「岡場所」とは「官許の吉原以外の遊里」のことで、吉原が「公娼」それ以外が「私娼」と言われたのもそのためで、江戸時代の多い時には百ヵ所もあったというから、大変なものだが、その語源については「ほか場所」から転訛したものか、という説と「吉原の苦海に対する陸場所か」という両説があるが、どちらであろうか？

句意は「うろたえる」だから、礎解通り「臨検」だが、この臨検は「官許の吉原援護」だった、という説もある。

前田＝礎解に賛。その裏付けの句を、少し左に——。

岡場所は時々いやな惣仕舞　（明四桜6）

岡場所はこれが悪いと混雑し　（明六亀2）

岡場所はいやな病いが折々来　（宝七、九、一五）

穴蔵へけいどの風が吹きこんだ　（宝七、一二、五）

岡崎＝岡場所で瘡毒（カサ）を背負い込んで、あわてているのではないか、とも考えられるが、警動説に賛。

清＝岡場所の最もはびこった、のが宝暦から天明の頃で、寛政の改革で大半が取払われ、天保の取り締まりで、全く廃止されたことになっているが、事実は根強く生き続けて、売春禁止法発動まで、十二階下から玉ノ井へとつながっていたのである。

丸＝諸説に尽く。

岡田＝近頃の諸君の勉強には敬服。——この論講も、すっかり板についたのは、うれしいことである。

○

輪講誤植訂正（一五）

17頁二段十八行目「**岡田**」ハ「**岡崎**」

〃　〃　二十七行目「**そうだ**」ハ「**そだ**」

バック・ミラー

本研究に関するご発言なんでもどしどしお寄せ下さい。＝係

岡崎重義

116 **よし原に居るから里見山といい**

この句、二月号（研究11）でも、定説が出なかったが、此間万句会を読んでいて、こんな句を発見した、何か解決の糸口にならないだろうか。

小男をねめ〳〵おきる里見山　（明二・桜4オ一六）

前句は「さそひ社すれ〳〵」

岡田＝常に、こういう研究心を持っているのはよい。（二月号）でも高須説に出たが、当時そういう力士がいたのではないかと、この句を見て、もっと調べて見る気になった。しかし、この句、前句とのツナガリがどうも遊所句臭い。再調の要あり。

暑中お伺

若本多久志　西宮市津門西口町五〇

北川春巣　大阪市旭区大宮西之町八丁目五七

土井文蝶　大阪市西成区松通九の二二

西尾栞　八尾市八尾木八一七

川村好郎　大阪府泉北郡高石町北四六五

松江梅里　大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇

川柳不朽洞会常任理事

芭蕉ざれ言

東野大八

「家を建てるので、地ならしをしている土建屋が、一つの味のある石を掘り起した。みると芭蕉の句碑なんだな、そこできる人に話したら、値よく買うとのことで売ったそうだ」と岐阜の友人が話していた。君がいたら欲しがったろう、ともいった。

しかし、私は芭蕉の句碑には興味はない。というのは、岐阜には芭蕉の句碑がやたらに多くてその稀少価値がないからだ。長良川畔の神社に

〃面白うてやがてかなしき鵜飼かな〃

という句碑があるが、私はこれ一つで沢山だと思っている。古い話だが、私が岐阜に来た早々、岐阜駅の拡張工事中、芭蕉の句碑が踏石になっているのをみつけ、それを大々的に新聞に扱ったら〃そんな石ならうちにもある〃と地元の俳人にワラわれた。川柳も俳句もこと句碑となるとソリャクには扱えん。とする私の潜在意識が妙なところで恥をかいたわけだ。

文献によると芭蕉は東国には疎遠で西国にその足跡が多く、美濃路は前後三度も往来しているそうだ。

伊予松山におられた前田伍建さんと、子規堂の句会で雑談した際、芭蕉は五十一歳で没したが、もう十年長生きしていられたらもっと俳諧はちがったものになったと思う、といわれた、私がいまその齢だが、まだ世にいう停年までには四年ある、子規堂にいたからではないが、子規の雑文を例にとると、芭蕉は食い過ぎで死んだ、とある。その死因はキノコの中毒であったらしい、とも書いてある。

芭蕉は生涯チョンガーで過したのは有名で、もし彼に奥さんがいたら、ああいったボヘミアンのだいご味は満喫できなかったらう。しかも悪妻ででもあれば、芭蕉の俳境は到底世に伝わらなかったかもしれない。

多情多感な芭蕉は、セックスから清教徒の如く遠のいていたので、世にいう〃いろけより食いけで胃拡張となり、生涯胃弱で苦しんだ〃だから、キノコにあたった時も、下痢どころかタダではすまなかったのであろう。

芭蕉を多情多感だ、といったのは

発句あり芭蕉桃青宿の春

という若い頃の句にうかがえよう。桃青といったのは二十歳台のことで、李白の対句としてのビジョンから桃青と名乗ったとあるが、中年以後は杜甫に興味をもったものの、いぜんとして晩年まで李白に傾倒したとある。したがって彼は、酒飲みでもあったわけで胃弱は食い過ぎと万年宿酔からきたと思える。今ならグロンサンをパクパク口にほうり込んでは句会の講演をやったり、弟子たちと気焔をあげるところうだ。

李白は酔うて水に映る月を盗ろうとしておぼれ死んだが、杜甫は子供運が悪く、奥さんにも先だたれて、淋しさのあまり菊に凝ったというわけだが、どうも李白にくらべてコセコセして気概に乏しい。宿酔いで、気分散んじにすすきの野っ原でも歩いていると、至って杜甫的発想が出やすいものだが、一旦飲み出したとなると、李白と芭蕉はチャンチキおけさの〃お前とオレさ〃ののみ仲間になりおうせたことであろう。

酒清
灘・魚崎
金露酒造株式会社醸

「芭蕉かつて戯れに許六のイビキの図を書く、かれまた頓智を有す。やや万能の人に近し」と子規も言っているが、一パイ入るとされ画は誰しもで、許六は気のおけない飲み友達であったに相違ない。

ともあれ「奥の細道」の紀行に「月日は百代の過客にして、行かう年もまた旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかうるものは日々旅にし旅をすみかとす。古人も多く旅に死せり。予もいずれの年よりか片雲の風にさそわれて、漂白のおもいやまず……。

とあるが、この文には酒ほどよくして禅境に通じた枯淡の想いが感じられる。酒禅一味の境地にしてこの名文ありだ。

麻生路郎先生の句集「旅人」のタイトルを横目に眺めながら、いまこんな芭蕉大聖のざれ言を書いている私だが、私ごときものも今も「死に損い」のわが半生は、つねに「旅人」だったという切実な感慨には変りはない。

芭蕉の句碑からとんだところへ脱線したが、旅にはやはり酒がこよなきものである、これがなくては、奥の細道などとてもじゃないが歩けない。

（星日酒後記）

高須啞三味を語る

――武藏庵のことども――

塚越迷亭

友情の金婚式、これは高須啞三味の言い出した言葉だが、喧嘩もしないでここまで持ちこたえたのは、啞三味が争いを好まないからで、鼻っぱしの強い私の言動から言えば、同い年の彼が私と同じ強気だったら二度や三度は喧嘩にならない筈はないのだが、振返ってみると、そんな形勢になったことはない。私が勝手に腹を立てて、彼を訪れなかったことは、数えてみると二、三度はあったが、そんな時彼は一切取合わないから、火に油をそそぐ如く燃えさかることは絶対にない。それほど冷静なのかと言えば、内に燃えるものは私同様なのだが、それを表に現わさない弱気が彼の持ち味なのでもある。

今を去ること四十年前……既に川柳作家だった彼が、菊池寛の「文芸春秋」や中村武羅夫の「不同調」に対抗する芸術運動を目標に「並行文壇」を創刊して、自宅をその社に提供している。同人には今を時めく今東光、後の品川陣居である中野武雄、北林透馬（その頃は本名の清水孝祐、）福富菁児（後に満鉄新聞の編集長で啞三味を満鉄へひっぱった）山口青邨、中野清人その他を擁して、その文芸雑誌は四号か五号まで刊行したのだから、内に燃えるものを持つことは確かだといえよう。だからこそ交通禍で左手切断の厄にあってもめげることなく無左手をもじった武蔵庵を名のり、益々健筆を揮い、雀戯を楽しみ、孫とたわむれる綽綽たる毎日を迎え、来訪の各地柳友と談笑、あるいは作句に、あるいは選句に、いそしんでいられるのである。

啞三味が左手を失ったのは六年前の昭和34年2月8日だった。その時私は仕事で湯河原へ出張中だったが、社からの電話で愕然としたのを思い出す。○丸が急逝した時もこの宿で、同様の思いをさせられたのだが、それはさて置き、啞三味の左手は切断しなくてもよかったのではないかと、後に気付いたことがある。それは事故が起きた場所から……牛込河田町近い東京女子医大病院で処置に、切断した方の肩が脱臼していたのを知らずにいた不注意さが、虎ノ門病院で発見して両手術という憂き目に会ったことから類推出来るからだが、痛さに堪え兼る啞三味が切断を承諾したからといって、その前の診断に……切らねばならないという……過誤がありはしなかったかと疑っている私なのである。尤もその日は日曜だったから万全の措置を望む方が無理かも知れない。とは言うものの診落されたために再び痛い目を見なければならなかった啞三味の友達として、このことは公表して置いてよいと思っている。

啞三味例の弱気から、そういう抗議めいたことを病院側へ申入れることをしないし、また一子夫人も我慢強いひとなので、そんな気配を見せなかった。一子夫人の我慢強さについては、書きたいことが沢山あるが、それを茲で言い出すと啞三味を語る紙数の大半をとられるので省くが、終戦後大連から引揚げてからの十数年を啞三味と別々に暮らすことに堪えぬいた……といっても色ぽい問題をおこす啞三味ではない……我慢強さは驚嘆に価いするもので、恐らく啞三味もその点では、一子夫人に一目置かざるを得ないであろう。

啞三味が西念寺で○丸の手によって仏前結婚の式を挙げたのは大正13年10月だが、その前彼はインポチントを称していた。なにしろ友達をみんな斯道の猛者（もさ）揃いの中で、遊びを知らず、女を知らず、ピュリタンを以て自他共に許していた啞三味が、インポチントを呼号すれば、私達はそうだと思い込むだけ、それを医すためにヵ印の蒐集と信じて、みんな啞三味のためにその蒐集に手を貸したものだったが、そのコレクションも関東大震災によって烏有に帰してしまったのを惜しんだ。私達だった。その頃啞三味の好きだった女性に……但し傍からみて、石坂梅子があり、五味茶童の娘があったが、これは啞三味のフェミニスト振りを岡焼半分にみた単なる噂だけだった証拠が、五味茶童の令姪一子さんとの結婚だった。そしてインポチントどころかまたたく間に……といても七、八年経ったろうが、彼は自嘲と題して

子を四人こさえただけの四十年
を宮尾しげを描く漫画に自署して「昭和川柳百人一句（初篇）」に登載に応じているそれによると、本名は鷲巣清治（たかすきよはる）で、略称が高須清二（たかすせいじ）なのである。尤も歿くなった彼の姉さんは「きよはるさん」といつも呼んでいたのを思い出すが、明治27年2月3日丸の内有楽町で生まれたのだから、江戸っ子ではなく東京っ子なのである。

そのころの若いもの……明治末年から大正初期へかけて……のあり方として、読むものには明治文学、見るものには芝居、聞くものには寄席といったものが、血をわかせるものだった。啞三味もご多聞にもれず文芸時には帝国文庫から鏡花もの、漱石から芥川と順を追った中で、短文芸に足を踏み入れたのは文芸倶楽部の影響であろう。だが彼は投書家としては熱を上げなかった八面子（巌谷小波）の狂句へ投句したぐらいで、私達と知り合った同誌の滑稽問答会への登場にも投書家としてではなく、いきなり問答会へ出たのだが、それは彼が、父親の経営する「自由新聞」の記者としての存在が、弱気の彼をして人おじすることなく何処へでも顔を出すことに馴れさせていたからだと思う。

早大政治経済学科を中退の彼が「自由新聞」（板垣系の政友会院外団の新聞）へ入るのは父親の必要からだが、後に「東洋自由新聞」と改めたが（西園寺公の東洋自由新聞とは別でも社会的には同系とみられていた）厳父の歿後、

この新聞の経営は弱気の彼のよくするところではないと悟って、父親以来の部下に譲って、実業之日本社へ入社「婦人世界」「東京」など編集にたずさわったが、大正14年飴ン坊の縁故でラジオ新聞へ入った。そこではからずも私と机を並べて校正の仕事をしたのが、友達から同僚への階梯の一つとなった。茲では飴ン坊の発案でほんとうに一つ釜の飯を食う話もあるが、くだくだしければ略そう。

飴ン坊と啞三味のつながりは大正6年土橋（今の新橋一丁目）の大黒鮨（洲崎の出店）へ川柳家が集まった時代があった。その頃の石坂梅子は女流川柳作家として美貌と才能を謳われた人気もので、梅子の土橋の店へ川柳家が集まらないのは嘘の感があって、大家も新進もよく集まった。そこから生まれたのが芝川柳会で、芝に住む剣花坊を担がすに、土橋へよく顔を出す飴ン坊（その頃の東京日日新聞の社会部長）を担いだのはすずかの剣花坊ぎらいのなせるわざだった。この初句会は東日（今の毎日）屋上で催された。私の句会で選をしたのはこの句会が最初だった。

この芝川柳会から啞三味と飴ン坊の仲は急速に深まり、西下した飴ン坊と行を共にして関西の川柳家と折衝を持つようになったし、飴ン坊を訪ねて来る地方の川柳家とのつながりも出来るといった具合で、水府の上京を迎えて諸方へ案内したのも飴ン坊と啞三味だった。その頃の啞三味は色白だったそして漆黒の髪の毛をオールバックにして小肥の躰に大島の対にセルの袴をつけて、その時代の文学青年らしい好みをして居たのを思い出す。飴ン坊は既に初老の域へ足を突っ込んで居たのか、その二、三年後に連日連夜弄花に耽った帰路の後ろ姿から老境を感じさせたきざしが見えたのであろう。

啞三味が私達からちょっと遠くなったのは興文社へ小学生全集の編集者として文芸春秋社編集部員の肩書で入って、菊池寛や芥川竜之介と折衝が繁くなった時で、そこで彼は麻雀を覚えて来て、弄花から麻雀へ転向の道を開いたのだが、啞三味から手ほどきをうけた珍茶坊、剣珍坊達と高輪……矢野錦浪宅……へと瞑原の火の如く、これが広がったのだから凄ましい限りである。それは芥川の死んだ頃だから昭和3年の興文社時代に名著文庫の編集にたずさわった啞三味のために全巻を揃えた本箱も台湾に預けっ放しだが、その名著文庫の中の川柳雑俳集は稀覯本として珍重されている。啞三味の川柳界へ貢献の一つであることを記して置こう。

昭和7年彼は私達の近いところへ戻って錦浪の斡旋で国民新聞社の整理部へ入って政治面の編集を担当となったが、間もなく彼は校閲部へ転じた。勿論私達に相談なしで、錦浪はじめ私達を啞然とさせたが、誰も彼には何とも言わなかったから私達が啞然としたことには気がつかなかったかも知れない。興文社時代から国民新聞時代にかけて、啞三味は私の編集していた「川柳きやり」に助力を続けてくれたが「竜巻」への応援、座談会への整理などより「川柳文典」の執筆は、川柳界への貢献は大きい。

その頃国民新聞の柳壇は三太郎選で、この柳壇を主体に国民川柳会が発足していたが……後に川柳研究となった……国民新聞社内の川柳家達が（黙六、柳行児その他）啞三味を担いで柳友会を作った。私は「よせよせ」と索制したが、それが却って、発奮を促がしたのか「柳友」という四六版（現在のB6）の柳誌となり、睡れる柳友を喚び起こして、消息を絶っていたのまで引っぱり出すという大活躍で、品川陣居という異色評論家まで作り上げてしまった。台東川柳連盟委員長山路星久洞も、啞三味が揺り起こした中の一人であり、後に啞三味が大連（昭和13年5月18日満鉄出版部主任として赴任）へ行ったあとを引継いで柳友会を存続させたし、川柳人クラブの創立当時は死んだ四方と大活躍だったが、最近はきやりと台東川柳だけであまり外へは出ない。そして柳友会は鳴かず飛ばずである。啞三味から一年遅れて台湾へ行った私は台湾日日新報社の内規で北支から満州への視察旅行が許されているので、啞三味の誘いを幸い、いよいよという時期が来たら大東亜戦争の激化で渡航不可能となり、ついに渡満の機を逸したのは返す返すも遺憾に堪えない。

その満州から昭和21年12月8日に佐世保へ帰着した啞三味は大連での終戦後労苦に憔悴しきっていた。翌年の春川柳会（荻窪だったと思う）へ顔を出した時「啞三味です」と名乗らなければ気がつかないほど痩せていたのでも知れる。その彼が職を得たのは23年2月だから、現実には丸一年と二三カ月の空費だが、妻子を諏訪の一子夫人の実家へ預けてのことだから、食うところと寝るところには南佐久間町の姉さんが在ったから困らないでも生易しいことはなかった。東京タイムズ校閲部へ入社ときまって、ひとごとならず安心したが、戦後のどさくさで行衛の知れなかった長男典介、次男文夫のそれも判明と、この20年間の啞三味の転変は物語りをなすものだが、それにふれている閑はない。私にとっては仕事の方……全国浴場新聞社……に無給の社員として満十五年過ぎても、来る月も来る月も二、三日を費やして呉れる友情を社の大恩人とだけでは済まされない思いに駆られているが、顔を合わせれば勝手な熱を吹く私を、うけ入れる彼なのである。そしてだんだんやせる私に反して、だんだん肥って今や目方は倍になろうとしている。「物言わざるは腹ふくるる」でもないのにとあくめ会（啞三味、鞍馬、迷亭の頭文字）の時を回想してみれば、私や鞍馬よりは肥るのは啞三味である。

こんなことをうだうだつらねているうちに啞三味の句をあげることを忘れていることに気がついたが、啞三味が近頃あっちこっちへ発表する隻手を詠んだもの、孫にかまけきったものより、昭和川柳百人一句に載ったものの方を紹介した方がよいようであると気がついた。

蚊帳つれば子供のはしやく一しきり

貢めた子の機嫌幌蚊帳押し歩き

焼栗を大事に食べる子の寝巻

児心にこの朝晴れを歌にする

疲れて帰る合服に寒い春

礼服でなく親友へ行く年始

散歩には妻台つきの下駄を出し

妻と子の虚言が許せて笑う朝

妻の髪今日一日の厨の香

読み倦きた夜永へ妻のお茶と来る

がそれだが、結局は啞三味は私川柳作家であることに今更のように気がついたのは、遅すぎるかも知れない、とはいうものの啞三味の私川柳に拍手を惜しむのではなく、それはそれなり認めていればこそのことでへんに言葉を飾らないのも、彼の弱気とまっとうさが醸らしたものであろう。

（文中敬称を略す）

無季俳句をどう思うか

化粧せぬ妻が家計簿いそしみ書く　橋本　修
トランクに跨ってさて怖い　都会　守田椰子夫
青年が混り肉購う列ずれる　石川日出子

あなたは川柳作家としてこれら無季俳句をどうお考えですか。無季俳句と川柳の相違又は相違、それらから考えられる色々の問題についてあなたのお考えをお聞かせ下さい。（編集局）

先ず彼我の認識を

甲府市　雨宮八重夫

化粧せぬ妻が家計簿いそしみ書く、
トランクに跨ってさて怖い都会
青年が混り肉購う列ずれる

「いい川柳ですネ」と言いたいが、実は川柳にしては古い。

このテーマなら古い柳誌を探せばいくらでもある。

こうした人間風詠や口語的発想や附句的表現は川柳では二百年も繰り返され、ずい分いい作品も生産されている。

それ等の作品を一応頭の中に入れてかからないと、折角従来の俳句から脱出しても、よそで耕しつくした畑の中へ飛び込んでしまう。

これは川柳の領土だなんてケチなことは言わないが、その畑の中へ「新しい俳句」の旗を立ててすまし込んでいても、実は畑の主から見るとむしろ滑稽に見える。

（このことは反対に川柳にも言える）

十七字という枠の中には俳句の外に川柳も狂句も冠句もある。

標語、格言、電文、報告文等も時には十七字形をもってこの枠内に同居していることはご承知の通りである。

その枠内で従来の俳句や川柳を揚棄して、新しい旗を揚げるからには他のジャンルでも未だ開拓していない新分野を発見しなければ意義がない。

○　○

丁度私は皇宮警察部の機関誌「済寧」に執筆中の「現代川柳初歩読本」の第七稿「川柳表現の特長」を書き終えた所である。

その要旨は、川柳表現の特長は附句性にある。附句性とは前に一句ある如く、後に一句連なる如きはたらきを残すこと即ち前後の用と、慶紀逸の言う「転」のはたらきを持つ表現方法で、そのためには未然形乃至連用形又は連体形止め或いは名詞止めが多く用いられて来た。

この表現方法は作品に弾力性と緊縮性を持たせ、内容を豊かにする貴重な遺産であるから大切に磨き高めて行きたいということを強調したものである。

最近の川柳を見ると名詞止め四五％強、終止形三五％、連用形一一％、連体形〇、九％位の割合いで、用、転の機能が稀薄の為弾力性も緊縮性も失なわれ平担な叙述に終わっているものが多い。

一方俳句の方を見ると名詞止二四％、終止形六二％、連用形四％、連体形八％、未然形二％という結果になり漸次川柳の表現方法に近似して来たことは見のがせないが、矢張り用、転のはたらきが生かされていない為この作品のように平坦な叙述に終わっているものが大部分である。

○　○

大局的には彼我の歴史性に立脚して、俳句が川柳の長所をとり入れ、川柳が俳句の長所を摂取して、従来の俳句にも川柳にも見られなかったような素晴らしい新短詩が創造されることがのぞましい。

この作品がその過程におけるあやまちとすれば笑っては申しわけないが、それにしてはもっと川柳を勉強して欲しいと申し上げたい。

○　○

ついでに川柳家として考えねばならないことは、俳句がこのように人事や、批判性や、口語発想や、川柳的表現に移行して来ているのに、ぼんやりと遺産によりかかっていては俳句に先行されてしまうということである。

柳俳混交する国境の中に、貴重な遺産をはっきり認識して一日の長どころか七万三千日の長所に磨きをかけ現代に堪える川柳たらしめなければならないと思うのだが、柳壇の実態ははたしてどうだろうか。

お互いの作品に訊いて見ていただきたい。

暑中御伺

秋月宏方
和歌山市今福東ノ町一二八

岸和田市上町三六
内藤きさ子
電話岸和田貝塚②八〇七九

長野井蛙
山口県防府市大字西佐波令字幸地一三一六ノ一六

渡辺暁童
愛媛県吉海局仁江名古地

石倉旅風
大阪市西成区松通一丁目八

小林孝正
新居浜市西原甲一三三九

室井八九寸
京都市北区紫野東運台野町二四

八木摩天郎
八木徳子
堺市九間町東二丁九
電堺②七二三五番

横山一声
岡山県和気郡吉永町吉永一四〇

隠岐朝夫
姫路市茶町三六
号・不酔
電話
姫路(22)二二〇七
五五九三番
上郡局三二
三〇〇七番

無季俳句について

姫路市　時実新子

私は俳句の制約をきらって川柳の自由を選びました。ですから近頃ますく多くなる無季俳句を見ますと〝おや、ここにも同志がいる〟と意を強くするのです。でもなぜこの人たちは〈川柳作家〉と名乗らないのでしょうか。現代の川柳を理解しようとせず、単に俳句であることの川柳への優越感ゆえならばナンセンスなことだと思います。それとも無季俳句は川柳ではないという確かな相違点に立って作句して居られるのか。私には川柳と無季俳句の差は殆どないように思われます。強いて相違をさがすなら、川柳は何よりも人間存在を重視し、無季俳句は人間を添景とした容観叙景ということになりますが、この引例句などは明らかに人間が大きな位置を占めています。つまり、無季俳句作家は無意識に川柳に惹かれて「川柳をつくっている俳人」だと申せましょう。

ところで川柳作家としての私がこの方たちに望みたいことは、俳句という名を捨てないのなら、やはり日本古来の伝統を正しく美しく継承してほしいのです。季を捨てて作句なさるなら、いさぎよく俳句という名も捨てられるべきでしょう。

伝統ある俳句はどこまでも守られ育てられてゆくと思います。そして私たち川柳作家も又川柳という名を捨てることは、おそらくないと信じます。ならば無季俳句作家は近い将来必ず川柳作家になる人たちだと言ってよいのではないでしょうか。現状の無季俳句が川柳でないという理由が、どこにも発見出来ない以上、これらの句は〈川柳〉だと断言してもよいと私は考えます。

とにかく無季俳句の隆盛は川柳にとっても喜ばしいことです。私たち川柳作家は誇りを持って、その向上に努力したいと思います。

（川柳研究社幹事）

俳句でも川柳でもないもの

小樽市　佐藤冬児

いまもなお季題を絶体化し、花鳥諷詠イデオロギーを主張する伝統俳句との比較なら、俳句と川柳の区別は割に簡単だ。

俳句は自然を主に人事を従にうたう感性的な観照詩であり、川柳は専ら人事を扱うところの、理知的な批評詩である。というようなことで一応説明がつくからだ。

ところが―。

（1）化粧せぬ妻が家計簿いそしみ書く　修

（2）トランクに跨ってさて怖い都会　椰子夫

（3）青年が混り肉購う列ずれる　日出子

（4）少年工の夢破れたり東京の罠に　未明

となると、その区別は簡単でなはい。

（1）（2）（3）がアンケートにある無季俳句で、（4）は当地の柳誌「こなゆき」から抜き出したものだ。

私のみる限りでは、（2）の無季俳句の方が、（4）の川柳よりよほど川柳的であり、私たちがいまやっている「諷詩」にも近い感じだ。

（2）も（4）も共に都会の怖しさをテーマにしているが、（4）の川柳は、一応自由律形式で人物やその心情を通して具象的なのはいいとして、文語調で一体に説明的で素朴リアリズムの限界にある。

（2）の方は「トランクに跨って」も、単に状景動作現象の描写でなく、その都会に象徴される現代性というものに、やや総論的だが批判を加えた、リアリズムの深化としての暗喩や類推の方法である。

現代社会は具体的なものと抽象的なものとの関係が、次第に複雑になっている。だから作者の認識それじたいも、相当高度な想像力や抽象能力が要求される。

従来のような花鳥諷詠イデオロギー、また素朴リアリズムでは、そのような対象関係や作者の認識精神をとらえ、盛り込むことが至難になって来た。だからまたリアリズムの深化はもとよりだが、たとえばいま創作方法とはいえないが、時代の先駆的芸術理念である、アバンギャルトとの交流を考えてみるのも、まんざらむだでもあるまい。

それにこれはあたりまえの事だが、文学芸術はそれじたい、現実を守護するためにあるのではない。たえず現状をうち破るところに、意義をもち、光彩をはなつのである。作者は現状にたえず不満だらけなのがいいのだ。

この観点から川柳と俳句の「相似」「相違」を歴史的にざっとみてゆくと―。

周知のように、川柳と俳句は同胞だといわれている。たしかに小林一茶（文政一〇、一八二七）の、ユーモアと諷刺性にあふれた現実的な生活俳句をみると、そのいわれがよくわかる。季題をとれ

橋本緑雨　大阪市住吉区平野西之町八三

槇紫光　愛媛県周桑郡壬生川町川新田・富士紡川新田社宅八号

竹原川柳会一同　代表　山内静水　広島県竹原市

桜川不水　下関市東大坪四町十八ノ十一

川柳雑誌社　岡山支部

藤井明朗　島根県大原郡木次町

京都　布部幸男

月原宵明　今治市常盤町八丁目

小児科・沢田医院　沢田四郎作　大阪市西成区玉出本通り一ノ一三　電話（西）二九一三

ばそのまま無季俳句にも川柳にもなるように、直接的な内容の一茶の句は、当時俳句川柳が町人文芸だったのに、稀しく農民的だというのは、いわば一種のアバンギャルト的だといえない事もない。

しかし文芸史上で明らかな無季俳句の起源といえば。河東碧梧桐（一八八四——一九三七）から、中塚一碧楼（一八八六——一九四六）の新傾向俳句であり。萩原井泉水（一八八四—一九五八？）の自由律俳句ということになっている。

新傾向俳句が、超脱趣味や個性及び社会性発揮をとなえて、俳句の近代化をはかり。さらに自由律俳句が、自由な発想感覚や抒情性で、従来の定形、季題、用語の花鳥イデオロギーを打破して、人間の生活的社会的現実をテーマにしたとき、俳句は明らかに川柳の分野に侵入して来たのである。

○死顔に化粧する紅が見あたらない　武二

○一日のポケットから何もかも
つかみ出した　一石路

その後自由律俳句が、第一次世界大戦による時代風潮から、「信解の詩」といった、求道的な小ブルジョア的心境主義の現実逃避傾向を辿るに及んで。反戦階級性を内容としたプロレタリア俳句が、自由律俳句の中から一派を形成する事になった。

○はげしい感情を戦争へ行く君に笑って　一石路

○大陸へ着いてポントやられて
村葬にされてしまって　弥十郎

プロレタリア俳句が批判性を内容としたとき、川柳との「相似」はさらに狭くなった。しかしそれは「相似」であって同化ではない。

恰度そのころ鶴彬（一九〇九—一九三八）同じようなテーマをプロレタリア川柳として詠んでいる。

○手と足をもいだ丸太にして返し　彬

○万才と上げていった手を大陸
において来た　彬

一つは定型で、一つは自由律だが。この鶴彬の川柳を読んで先ず感ずるのは、内容主題のもつ強力なリアリテーであり、その批判精神の烈しさである。

そこには川柳でなければとてもできない、対象のつかみ方うたい方がある。

たしかに俳句性や川柳性には、それぞれの歴史的発生の事情や条件がある、それによる文芸的内容や型式創作方法がある。そしてお互いが歴史の中で培った性格や特徴もある。

川柳はむかしから芸術性とはほとんど無縁なものとして、ものごとの真実をうがつことに忠実な野性的な性質の文芸として、いわゆる三要素によって、批判精神及び文芸的リアリテーを誇っている。

それはむしろ非芸術であることによって、その文芸内容を性格化抽象化しているともいえる。鶴彬の作品にもそれがみられる。とくに彼の作品は、芸術であろうとなかろうと、事実のもつ力強さと批判精神の烈しさで読むものの心をつかんでくる。

そして一方彼の作品は、何か俳句と川柳のちがいとか、一般的な柳俳の概念を超越しているような感じがある。

いま「諷詩」の内容及び性格を、石原青竜刀は「柳主俳従」、批判性、社会性といっているが、それはすでに内容的には川柳でも俳句でもない、それはまたアバンギャルトとリアリズムの二つの芸術的理念の、綜合的可能性の追求であり、そのあらわれともいえるだろう。

一九六四、五、二七

柳俳の別にこだわらず

東京都　石原青竜刀

すでに方々に書いたことだが、現在のぼくの柳俳観は「あまりこだわらない」ということである。河野春三の「短詩無性」論と似たところもあるが、俳句として作ろうと、川柳として作ろうと、短詩文芸として鑑賞にたえるものであればそれでよいという考えである。ただその場合、批判精神を重視して、それの無いものは柳俳ともにあまり高く買わないというのがぼくの立場…すなわち「諷詩」精神主義である。換言すれば、在来の抒情本位の俳句や、人情風俗の十七音綴り方にすぎない川柳は、過去の文芸として、今日及び将来の文芸としては高く買わないということである。

今日「無季俳句ということば—あるいは呼び方はナンセンスである。季（季題あるいは季語）と五七五十七音が俳句の条件だとされたのは原始時代のことで、いかにそれを修飾し、理くつつけようとも、しょせんは伝習であり、慣習であるにすぎなく、文学的に必然性はあり得ない。この点において川柳は季という無意味な制約をもたなかっただけに、はるかに先覚的であった。短詩文芸にかんじんなことは作者の精神（こころざし）であって、それをいかに伝達するかというところに作品の方法論があるだけで、そこに季などいう夾雑物の必要は無い。その真理に忠実であるならば、必然的にいわゆる「無季俳句」が生まれるわけである。無季俳句と川柳との区

山内静水　竹原市竹原町田中

越智一水　今治市大新田五六五番地

虹川柳倶楽部
新岡回天子
電（唐津二七一八）

川雑淀川支部
大阪市東淀川区十八条町一ノ二一
西森花村　坂田東洋男　志水礼司　早川清生　平田三十郎　小島孝夫　木村水洞

大阪市東淀川区十八条町一丁目二一
木村匡利（まさとし）
号水洞
匡余（まさよ）

稽古場の汗へひろげた舞扇
若柳潮花泰子

高槻市富田町七六七
総持寺団地三六号三〇四

別とか相似とかの問題をあげつらうことも、本質的には無意味である。

無季俳句というものの一応の先達と見られる日野草城の、句碑にも刻まれて後世にのこることになった五句の中に

見えぬ眼の方の眼鏡の玉も拭く

というのがある。句碑に刻んだのだから代表作の一つとされているものにちがいあるまい。この句が発表された当時ぼくはこれは川柳だと指摘した。当時ぼくはまだ柳俳の別にこだわっていたので、この句の発想内容には在来の俳句としての抒情が無く、川柳の本領であったウガチの部分が強いということを指摘したわけである。このぼくの指摘は川柳界では誰も同感であった。もちろん作者草城としては、意識的にウガチをうたったわけではなく、そのような人間の習性に対して、一種自嘲的な詠嘆をうたったもので、そこに抒情があるとするだろう。そしてそこが門下から代表作の一つとして選ばれた理由であろう。たしかに、この句から人間の習性のある種の「あわれさ」を感ずることはできるのだが、川柳のウガチだって、単なるウガチだけでなく、人間風刺から、「あわれさ」へのイメージがひき出される場合は多い。結局問題は、この句が俳句界(特に草城門下及び同調者)で評価するほどには川柳界で高く評価されないという点である。すなわち、俳句作りが、しばしばおちいるところの「俳句の方ではめあたらしいところをうたったとおもっても、川柳ではすでにいいふるされているようなこと」に、この句は該当するのではないか。これは俳句作りの川柳についての無知から来るもので、ホトトギス俳句などに、このような例の多いことはぼくが前に指摘した。いうまでもなく、ぼくはそれが川柳のがわから見て新しくないということだけを主張するのでなく、短詩文芸として高く評価できないということを主張したいのである。

こんど「川柳雑誌」編集部から提出された無季俳句作品について見よう。

①化粧せぬ妻が家計簿いそしみ書く

②トランクに跨ってさて怖い都会

③青年が混り肉購う列ずれる

①は「化粧せぬ」と「家計簿いそしみ」とがつきすぎで「あたりまえ」すぎるので短詩文芸としての感動力に乏しい。せめて「化粧ちゃんとして家計簿にいそしむ」というぐらいの人間風刺がほしい。

②は既成川柳としては一応の水準作だが、ぼくのようなスレッカラシには「怖い都会」という常識性が感動を呼ばない。「トランクに跨って」まではとにかく肯定できるのだが。下はもう「ひとひねり」ほしい。③は常識的でない作者の「眼」人間批判があり、三句の中ではいちばん興味がもてる。ただ「青年」ということばの「ばくぜん性」がもどかしい。「肉購う列ずれる」は的確な川柳的把握とおもう。用語として「購う」のキドリは取らない。「買う」で十分である。

人間と人形

静岡市　稲村雀穂

季題尊重論者は、季題があっての俳句であり、俳句(作品)の出発もそこにもっていかなければならないと説いている。だとすれば、無季についての判断はすでに、してはならないものかとウタガイがもたれる。

言葉としての季語の存在ならいいが、呪文に似た季題の使用方法では、真の意味での季の在り方が消滅する恐れがある。

有季、無季にこだわらず、すべては作品に作者が存在するか、否かで断定されるべき材料が提供されてこよう。

引例三句、

一句目、伝統川柳、俳句のアイノコ的要素が感じられ、句の仕立て方が俳句であるということだけのこと。句語の省略にもっと気をつかえないものだろうか。

二句目、三句目川柳と相似点の近いものを感じたが、二読、三読して作者のこころはくみとれず、描写の域をぬきでていないのではないか。

俳句作家の眼は素直すぎる。その素直は尊びたいが、今一歩の切り込みを希うのは勝手すぎるであろうか。俳句人全般にまだ貴族趣味的のもの、考えが残っているとしたら、いつまでたっても作品は、心のない人形としかなるほかはない。

いずれにしても俳句作りが、このような方向に傾斜するのは、短詩文芸のために歓迎すべきであるが、前にもふれたように既成川柳のあとを追わないように、べんきょうすることがかんじんである。

(一九六五、五月)

無季俳句の知識に乏し

京都市　坂根寛哉

最近の無季俳句が、どのような主張をもちどのような流れをもっているか、怠惰な私には知識が乏しいことをお断わりして、お答えにかえます。

化粧せぬ妻が家計簿いそしみ書

弘津柳慶
山口県柳井市専売公社内
川雑米子支部松露川柳会
小西雄々
米子市富士見町一三五

野村味平
石川県加賀市大聖寺町耳聞山三六

京都支部

室町寺ノ内上ル　井ノ下晴芽
深草相深町　大鶴喜由
藪屋町六条西入　大久保和三郎
相国寺七門前　田中烏雀
醒醐日出ヶ丘　竹松九角

川柳雑誌社

山科厨子東　小林亀一
同西野山　平井絵丘
同勧修寺　平岩司郎
小山東大野町　本儀親生

く　　橋本　修

〝化粧せぬ〟〝家計簿〟こういった類型をとりあげて成功させているもの、非定型という大げさなものではないかもしれませんが、俳句的なそれらの味わいがあると言ってもいいのではないでしょうか。

トランクに跨ってさて怖い都会
　守田椰子夫

作者の訴えたいものがデッサンを取り違えたとでもいうのでしょうか、私には価値ある作品として迫って来ません。川柳ならばもっと積極的なデッサンをこころみることでしょう。

青年が混り肉購う列ずれる
　石川日出子

作者が女性らしいことと考えあわせて、やわらかい雰囲気の中から生活をあかしているように思えます。しかし狭白もイージであれば、それだけ鑑賞者に不親切ではないでしょうか。もっともそれを意識しなければならないことはありませんが。

以上たった三句の印象で無季俳句を述べることはできないと思いますが、強いて言えば、この三句が持っている川柳との接点を考えあわせて、俳句という強じるしを掲げる稀薄性をおもいます。むしろ口語俳句のはうがその特異的な存在をひろげつつあるようにもおもいます。

いずれにしろ川柳を知り、またそれを知ろうと努力している私にとって、川柳はよろこびであり、またそのよろこびも、川柳の分野にいるものの努力いかんにかかっていると信じています。

ハガキ設問に答えて

静岡市　小泉十支尾

無季俳句を現代俳句と、川柳を現代川柳と読みかへて言えば、俳句の川柳への侵犯、または川柳の俳句への追随等々の非難などで解決され去る問題でなく、俳句が社会的姿勢に傾斜すればする程、人間の深層心理の追求に志ざせば尚更ら、俳句と川柳との対象の差異はあり得ないのは至極当然のことであろう。

僅かに、ごく一般的に、俳句は曲線的表現に執し、川柳は直線的表現に走る、と言うに過ぎないのではないかと思われる。併し、これすら一部においては、既に完全に交差しているものすら散見される状態である。

そして私は、こうした状態を肯定したい。いやしくも一つの文芸として、俳句乃至は川柳を選んだ以上、十年一日の如く、先人の開拓した境地にのみ遊んでいることで、作家的意欲が満たされるものだろうか。辺境を究めたいと努めるのも、あらゆる素材を吸収しようとするのも、そして絶えず変化を求めようとするのも、俳句乃至は川柳作家として、これまた至極当然のことと思われる。

俳句が、季語や切れ字やを、決定的要素ではないとしたことに敬意を表する私は、川柳の諷刺や穿ちやを、川柳だけのものでないとする説に賛成する。

現在、俳句と川柳とに理論的に納得出来る区分を見出し得ない以上、こうした現状を肯定した上で、共通の広場として、相携えて錬磨し研讃してゆく道を執りたい。

設問の趣旨に遠いかとも思われたが現代俳句と現代川柳との問題についての、現在の考えを記すことによって回答に変えたい。

無季俳句は川柳のお化け

金沢市　森下冬青

三十一音の短歌と、十七音の川柳との相似、相違の問題なら、私の知っている限りにおいて、とやかく問題が出たことはない。こと川柳と俳句なら、同じ十七音の仲間だから、これは、随分とむかしから問題が出ている。ところが過日、川柳雑誌社の方から

＜あなたは川柳作家として、これら無季俳句をどうお考えですか。無季俳句と川柳の相似、または相違、それから考えられる色々の問題について、あなたのお考えを＞

とのことで、無季俳句と称する作品を引例が適当でないかも知れませんと、三句発表した印刷の葉書が届いた。これは印刷しての問い合わせだから、随分多くの解答者があるだろうけれど、＜あなたは川柳作家として＞に対して、一パッの川柳作家のつもりでいる私の考えを筆にしてみよう。

まず最初、引例作品からはじめてゆこう。提出された方は、流石、川柳作家ゆえに、この三作は、川柳の畑へ入っている。

○化粧せぬ妻が家計簿いそしみ書く

化粧もせず、家計簿にいそしんで書いている妻の姿は、いかにも清楚な感を思わせているかのようだが、夫から見た、化粧せぬヌカ味噌臭い女房の姿、形であるを含みとしている。

○トランクに跨ってさて怖い都会

松山恵子の唄う歌だったか、＜東京ッて何さ＞を想像させられる作である、トランクに跨って、

吾郷玲人　大阪市住吉区御崎町一丁目
根上杏花　金沢市堀川角場町一六
野呂鵜汀　西宮市鳴尾町四の五
時実新子　姫路市鍵町四〇
柳川ながさき　長崎市新大工町　池田可宵

会　北川春巣　浜畑胡蝶　富岡淡舟　橋本雅巣　児島与呂志　岡島孤舟　米虫一の字　西岡洛酔
柳川局通交　小田垣蝸牛
大阪市　藤井力泉　草深酔升　福島正則　山口雅万　森扇帆

如何にフテブテしく、手法を使っているあたり、しかも〈さて怖い都会〉なんての現わし方、そのものが川柳のもつ味である。

○青年が混り肉購う列ずれる

作者に、女性の名が入っていたから、女性の心から観た、肉購う列に混っている青年である。この頃、共稼ぎ夫婦が増えてきたので、肉購う青年はその方だろうが、大体、女性の多い列だろう。若い男性のもつスタミナのある動きに「列がずれる」の座五を生んだと思う、そこにフウトおかしさを読者にあたえてくれるものは川柳のもつ味だといえる。これは、川柳と相似した、無季俳句と称する作品である。で作者は、あくまでも無季俳句という観念で作句している以上、彼等へ、その作品を川柳だといっても、決して納得はしまい。

私は、ここに一体、無季俳句という俳句が独立して成り立つのかと疑問を感じる者である。俳句の始祖が、松尾芭蕉であるなら、芭蕉の作品を読み味わっても解るように、無季という概念は何処にも住んでいない。

松尾芭蕉という人は孤独性の強い自然児だと私は、芭蕉の文なり作品を観て、そう思っている。いつも放浪の旅をして雄大な大自然を眺め味わいつつ生きた人間の作る発句（俳句）の作品は、四季を通じて作品に「季」を忘却している等はもうとうない。古くから俳句を作る者は、歳時記は必要、欠くべからずになっているのも、そこにある。歳時記の種類は随分と沢山あるが、歳時記が作句する者に必要かくべからずにあるも、俳句は芭蕉の心をついで「季」が本命だからである。

俳句は、季が本命だというのは、松尾芭蕉が居に永住性がなく放浪の苦楽を共にして大自然の山川草木、花や鳥、風月を眺め生き、そして生かされて来た筈だ辞世の作と言われる。

○旅に寝て、夢は枯野をかけめぐる

いかにも芭蕉その人の心が作品になっている。故に、時代は流れ、流れて現代において、新俳句といえども季を忘れた作品は俳句の存在価値がないと確信するものである。

× ×

俳諧を親として生まれた、川柳、俳句は同じ十七音を姿としているため、領分争いは随分とあった、俳句は、季を本命として文語体に作るなら一応俳句として通る。ところが川柳になると一般大衆に、川柳は滑稽なものと思っている人が多い。俳句人も川柳の仲間からすれば、川柳の姿と身近にあるも、一般大衆に外ならない、だから川柳をば滑稽なものの観念しかもっていない連中が多い。で滑稽でない川柳を〈俳句の化けたのや〉という人もあるから心外である。

川柳作品に就いて評論家とか理論家という方たちは、現代においても沢山いられる、その人達の文を読ませてもらい参考になったが、私は、評論家でも、理論家でも、ないので所謂、実作家なのであるから、実作家としてながい経験において感じとった、川柳とは、いかなるものかを私なりの考え思いを、簡単にいうならば。

川柳は人間の心を探りあて、それを口語体の十七音に織込んでいく詩（うた）だと心得ている。川柳の本命は、諷刺だと主張するグループもあれば、うがち、滑稽（私はユウモアーと言いたい）軽みの三要素が川柳の本筋と主張する、われらの作家仲間は随分と多い。

これにつき、私に言わせば、諷刺性や、三要素は、川柳のもっている「味」であってその味だけによって川柳の本命とは考えられない。

短文芸の短歌にも味があり、俳句にも味がある。果物でいうならば、みの瓜の味、柿の味、リンゴの味、同じ果物の仲間でありながら味は各々相違しているだから勿論、みの瓜は柿ではない、柿はリンゴではないし、リンゴは、みの瓜ではない。

川柳は、人間の善悪、悲喜、思想らを探りあて味として諷刺性、うがち、滑稽、軽み、をとり入れ口語体にする。それが川柳の本体だと信じている。

この意味で、川柳雑誌社から。提出された、無季俳句は、川柳の畑へ入って俳句であると、そらうそぶいている感が実に深い。

× ×

われわれ人間仲間において、ザ・ピーナッツや、こまどり姉妹のように一卵性に生をうけるものもいるけれど、二卵性に生まれる双児もいる。俳諧を親として生まれた、俳句、川柳は完全な二卵性である、で同じ十七音の姿をもっているが、川柳、俳句としての特異性があるのは間違いない。ところが無季俳句と称する作品が川柳の化けたようなのではちと困る。

只、ここにことわっておきたいのは、川柳は無季である、この問題である。春、夏、秋、冬、の四季の中に生活しているのは俳句人だけが住んではいない。川柳人も同じく四季の中に生活して住んでいる、たとえば、夏になれば、青簾、冷奴、打ち水、等々と季にふさわしいものが作品の内に顔を出す。川柳は季は本命でないだけであって季節感は、作品にも現われるのは当たり前である。

まだまだ、書きたいことがあるが、このまとまりのない文に、無季俳句と川柳の相似、または相違が、いくらか答えとして含まれていれば幸いである。

暑中御見舞

申し上げます

麻生路郎先生選

大万川柳会

投句ご希望の方は（課題41頁参照）

大阪市阿倍野区松崎町3の10　松江梅里方へ

近作柳樽

麻生路郎選

北川春巣選

小ざっぱり着せる親あり精薄児（竹原市）　杉原愛鳩　同

かげ口がもうかげ口でない落目　同

雑種のあわれシッポをやたら振り　同

配当金夫婦でとりにゆく暮し　同

どこにでも少年Aの居る恐さ　同

第二組合へ共鳴古いと云われよが　同

飲代はマダム香華のかわりにし（倉敷市）　水谷谷水

無職またアユ釣りですかと羨まれ　同

愛相のない娘で興信所に勤め　同

あたまかずだけの妓につねられる　同

トランペット老らくが恋うるさがり　同

役得のイスで馬鹿正直に老け　同

母も居て嫁居て蜘蛛の巣がとれず（青森県）　岩淵一星

婿に招かれて洋酒へ初対面　同

養豚と野菜主任で母達者　同

病む人へする親切を病んで知り　同

御大事にねえと効かない薬くれ　同

一円へ一円出して感謝され　同

ガード下の点景今日も易者の灯（加賀市）　木村一路

好きにさせて呉れと友情避けている　同

THEENDやっと離れた手のぬくみ　同

奉賀帳最初の方は見ずに置く　同

無い袖を振れと納税期が迫り　同

サキソホーンうるさい趣味を子に持たれ　同

髪あかく染めて多恨の女病む（羽曳野市）　井上圭太

青春の和解グラスの音高く　同

本降りとわかる雫が乗ってくる　同

花束も凶器も持ってファンの列　同

三回忌やっぱり故郷の茱萸の紅　同

当選の仲間を蹴ったことばかり（枚方市）　宮川珠笑

賃上げ回答労組定石通り蹴り　同

寝るだけの部屋を見晴らし云って選り　同

薄給の腹いせ官吏の高姿勢　同

どの顔も脂ぎってるホルモン屋　同

冷たさを買われ税吏は累進し（新居浜市）　安藤桂仙

孤独感テンポのおそい歌がすき　同

麻雀の手並を見せる帰省の子　同

辛うじて食うに税だの寄附だのと　同

暑中御伺

川柳雑誌社鳥取支部

大西八歩　河村日満　杉谷湖山　森田茗人　福田多可志　岡嶋芳道　北村三歩

川柳雑誌社阿倍野支部

事務所　阿倍野区松崎町3…10（松江梅里方）

今西章雅　泉竝悦子　井上つる子　本多柳志　金井文秋　河井庸佑　桑田嘉代子　菊沢小松園　松江梅里　宮尾あいき　小川恒明　辻川喜仙　柳生野菜

ABC順

麻雀へ聞えるように子を叱り　同
テレビ佳境入り手がなくて風呂がさめ　高知県　山川　勝子
暴落の胡瓜を朝昼晩と食べ　同
今朝死んだ室とは知らず入院し　同
爪染めて米は杓子で洗う嫁　同
毎年の事だがすだれの置きどころ　同
明治はよかった境内の広さにも　高知市　須藤　俊江
就職のつもり再婚物色し　同
真昼間の情事をビルの工事が見　同
スパイの如き女一人いるアパートストのないおふくろの愛の尊さ　同
無資力の一念資本家を降し　八代市　永松　道雄
連休の一家を恵む湯のかおり　同
格別に孫可愛いさの血が通い　同
梅雨空を青い西瓜が葉にかくれ　同
兄弟の腕で本家がたちなおり　同
独り居の奢りバラの香満ちさせて　西宮市　末沢　花美
サングラス孤独の瞳かばう気の　同
カミソリの刃に向い居る愛と知る　同
結果論ばかり云うてインテリー　同
セロテープ貼って置きたい程ぐちり　同
落ち口の溝にゴムマリまだ踊る　京都市　大久保　和三郎
相談欄われも覚えのある活字　同

結ばれてからは女に引きずられ　同
古疵に触れる写真をまだぬくめ　同
なんぼくれると云う世に成り下り　大阪市　林　緋砂子
整形をして高卒は勤めに出　同
眼の色で心のぬくみ感じとり　同
墓もうでねむれる人は話好き　同
スト妥結毛糸転がる寮の夜　玉島市　井上　旭峯
水銀に自由が欲しい寒暖計　同
膝の子の重み再婚辞退する　同
他人には読めないメモでよく儲け　同
故郷の母団地の五階二度やすみ　大阪市　山田　李鳥
着る柄は決まらず食べる物きまり　同
ライバルが裏の作法のお茶の席　同
裁ち鋏爪切る子から取り上げる　同
忙しい筈が負け碁に腰を据え　仙台市　日東里
役人の古手名刺へ判をつき　同
老夫婦何にも云わで用が足り　同
ほっとした顔も見送るご栄転　同
借りられた反動服も靴も買い　大阪市　川口　弘村
コマーシャルにつられてテレビの眼を休め　同
旅帰り素足に畳の目を感じ　同
ビール一本母も妻もとわけてのみ　同
写真屋に客のついたを鹿も知り　奈良市　村上　春巳

部支中豊雑川

戸田古方
黒川紫香
村上ゆずる
竹内圭三
小池しげを
永藤弥平
菊田いさむ
増田敏治

高峰柳児
長野県須坂市太子町

唐崎専翁
芦屋市翠ケ丘一六七
電芦屋②六二八二番

田村緑朗
号・藤波
岡山県英田郡美作町湯郷五五一

木村千容
岡山県倉敷市新川町千壱番地

工藤甲吉
青森市長島三ノ二
東奥日報社編集局内

部支鉄大

松川杜的
辻白溪子
植村客遊子
宮口笛生
吉原紅月
永尾永断
都倉求女
大江秋月
山田季賛
中塚磯石
阿万万的
松下たつみ
正本水客

木の影へ鹿が避難をする暑さ　同
写真機へ鹿心得たプロフィール　同
看板屋のその下うけのベレー帽　大阪市　稲本　凡子
微熱続きバラの真紅のとげとげし　同
情熱も小出しになって恋徐行　同
この次は僕が逝くぞと撮される　神戸市　吉田　隆史
優勝に応援団も胸を張り　同
お隣のウィンクにこたえ間のわるさ　同
焼香へ二号他人の顔で佇ち　新居浜市　賀本　昇
焼け落ちた棟へ野次馬どっと沸き　同
隠し子もあるに社長の謹厳さ　同
器用さが祟り日曜大工する　七尾市　松高　秀峰
名医と云われお世辞も少し言い　同
特価品貴重な朝を列ばされ　同
大阪のスリ思いだす夏祭　大阪市　藤冨　淀月
口下手がお通夜で話すエピソード　同
手がかりのない間に二台目も盗られ　同
貧の底父は寝棺がよいと云う　兵庫県　常岡　孝風
愛の讃歌乳房の隆起目に残る　同
貧乏の延長市場籠の空虚　同
病んで今土曜の良さを忘れける　羽咋市　谷　一征
悠然とステテコも乗っている夜汽車　同
アメリカは赤より黒に気を使い　同

千金の価バス料金の風　玉島市　水粉　千翁
雲追うて息を入れてる峠道　同
丸木橋デイトはじめて手を握り　同
週末を面会謝絶して箱根　大阪市　米浪進之助
死ぬのにも虚栄ずらりと立つ花輪　同
婦唱夫随で通し朝から笑い声　同
はつ孝行タワーへのバスに押し込まれ　東京都　山本　木象
試歩の手がそっとふれます豆の花　同
熱帯魚人待ち顔の眼をよぎり　同
針の目を母は子供の目に頼り　宮崎市　野口卯之助
太陽が沈みはじめてからの恋　同
足許を見られたような値に決り　同
玄関も茶の間も車庫へ食いとられ　金沢市　根上　杏花
空気までPRして分譲地　同
字が読めて駅が楽しい一年生　同
星空もきれいに見えぬ夜を勤め　高槻市　撫本　枝蝶
まとまらぬこころ紫煙を追うた　同
避けていりゃ調子にのってバイク行き　羽咋市　三宅　ろ亭
我も人彼も人だと帯を締め　同
金魚の屍絢爛として水を染め　大阪市　和田　痴亭
倦怠期あさりは白い舌を出し　同
またの日を約して見舞それっきり　隠山県　永宗　宗義
赤旗の要らぬボーナス社も儲け　同

暑中御伺

大阪市南区二井戸町二三
山川阿茶

川雑婦人友の会連絡事務所

麻生葭乃　山川阿茶　中島小石　太田良子　高橋操子　西出一栄　酒田清子　藤村〆女　内藤きさ子　小西富士子　八木徳子　市場カネ女　安本美喜　置田ふじ　藤岡花梢　中村晴　林春栄　西村梨里　岩田美代　森川すみれ　鳥取周甫　天正みさ子　三井酔夢　児玉しげ子　鳥取周甫

臀部まで計り美人の部に入れる（パロアルト）　斎藤　流路

タイプ脹出雲の神に縁がなし　同

住職にあった不満の声を聞き（堺市）　青山慶之助

流行を追わない主義と負け惜み　同

所得倍増通貨のねうちを下げ（石川県）　大山　雅城

諦めてしまえと他人事だから言え　同

おしゃべりがとぎれ昼寝のあゆの宿（香川県）　三井　酔夢

黒潮に佇ち桎梏を虚無にかえ　同

おとなりも野球ら逆転に声があり（松原市）　守屋　万竿

帰省の夜母の手料理父の酌　同

いいとこで割込んでくるコマーシャル（富田林市）　吉岡　美房

筆不精やっと書いたを出し忘れ　同

笑わせる事も心得角がとれ（山梨県）　赤池　五朗

ふたありになっても女房日日せわし　同

免許証もってて自家用車へ嫁ぎ（仙台市）　平野　光道

派閥政治への悲憤酒なき夜　同

けい古事オールドミスのスケジュール（大阪市）　西本　保夫

寄附だけは断わる勇気平社員　同

つかい込みのうわさへもくり案じだし（兵庫県）　斎藤たけお

農地報償父さん死んだをくやしがり　同

あの山も川も見あかぬ八十八（加賀市）　亀田　六角

喜の祝い銚子持つのが古稀の妻　同

耕耘機に株を取られるノイローゼ（茨木市）　高木繁太郎

青春の残酷さ母もう要らず（羽曳野市）　杉本　胡人

潔癖な心左遷も苦にならず（松江市）　岡崎　祥月

子沢山だけが母さんに似ています（大阪市）　宮尾あいき

早鞆の朝の光が銀に見え（出雲市）　和泉　松風

親の愛すこんぶかむ度思い出し（大阪市）　福富　隆子

若僧も頭をそって鑑真忌（京都府）　西村句楽坊

力強き足音をきく夜を学ぶ子の（京都府）　竹井吉備郎

よれよれの服は日の出をまぶう呼け（河内長野市）　森本黒天子

虎の子の置場所云わず死んじまい（富田林市）　岩田　みよ

音痴なピアノ習わせいじめてる（笠岡市）　谷本鈍愚坊

停退に後三百日の日が暮れる（八戸市）　川村　映輝

孤独な空間をつくる赤い雨傘（尼崎市）　高田　千穂

大阪形水
大阪市東区糸屋町一ノ二

吉田圭井堂
堺市浜寺昭和町一丁三〇
電堺⑥三〇五四番

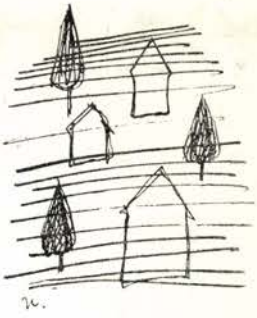
さんばつは
何はともあれ
男前
（南柳）

男まえ
大阪市阿倍野区
天王寺町北一ノ十八
（省線寺田町裏駅南一丁）
TEL(71)6287

作句の稽古について

——本社七月句会の柳話から——

川村好郎



毎月川柳雑誌社主催の句会や、各小句会、支部句合に出席している我々はつい慣れてしまっているが、句会ほどすばらしい会合は余り世間には見付からないと思う。出席には何等制限がなく川柳愛好者は勿論、ひやかし半分の方々も拒ばないで誰でも入場が出来、会費は均一に顔は効かない。古参であろうが、初心者であろうが席順の上下はなく自由に好きな場所に席をとり貧富や社会的地位の区別もない。柳人として老若男女心おきなく話合うのである。しかも投句は無記名ですべてのものが同じ題で投句し、柳懸は問わない。佳句はたとえ初心者であっても選者は抜き、二十年、三十年の柳歴を持つベテランの句であっても凡作のものは何の容赦なく没にされるのである。こんな平等な普遍性な世界が今日の社会にあるだろうか。実にすばらしい世界だと思う。肩書、派閥、履歴がものを云い、コネが実力よりも得をする現代に於いて、我々はこのような愉快な会合を持っていることを誇りとすべきである。

相撲界は稍それに似たところがある。過去を問わず一番勝負で不敗を誇る横綱も稽古不足、体の不調では平幕の実力に大差あるものにも土俵に四ツ這いにされるのである。しかしやはりここには制限ある。横綱と幕下とは組合わさない。富士錦も関脇との顔合わせが最高である。同部屋同志は本場所には組ませない。

先月の本社句会に私は出席したが、其の席上、及ばずながら私が川柳の手ほどきをしている羽曳野どんぐり川柳会の方や丸紅川柳会の会員の方が数名出席していられる。私は不勉強にも兼題もまだ十分に作句してなかったので、これは大変だ、弟子等に負けてはと一生懸命に作句した。ところが其の場の作句の上に、常に稽古が足りない私の句は兼席題を含めて僅かに二句しか、しかも平抜きで抜けただけだ。弟子達はと注意していると各題共に抜け、中の一人は天の天位を獲得をしたではないか。先生全く顔色なしである。出藍のほまれです。私がカップを獲得するより嬉しいですと云っているが、それは負け惜みであって、たしかに負けた。その人は常に稽古をし、今作句に一生懸命であり、決して幕下とは思っていないし、私も決して横綱でも大関でもないが、この一番勝負私は土俵に四ツ這いにされた。

句会は過去の成績、柳歴、顔が効かない、平生の稽古が実り、一番勝負である。私はこのあり方は鏡に似ていると思う。

鏡は過去を写さない。鏡によって自分の現在のありの儘の姿を見ることが出来る。おどけ鏡というものがある。平面の鏡でなく凸凹がある。従って正しく写さないで或は顔を長く或は足を短かく写す。その正体と違った我が姿を見て誰一人怒るものは無い。皆笑っている。それは鏡がほんとうでないからだ。うぬぼれ鏡というものがある。これも本当の我が姿を写していない。世の毀誉褒貶に腹を立てたり、うぬぼれてはならない。句会の選もおどけ鏡や、うぬぼれ鏡であってはならない。選者の責任や大であり、よき指導を持ち正しき選により、己を省り、己を知り、そこから稽古を励み、それぞれの個性、感覚を生かして作句してゆかねばならない。

先日私は天王寺ステーションビル地下で散髪をした。理髪店の命ずるまま鏡を前に腰を下した。散髪をして貰いながらふと鏡を見ると向こう側の散髪をしてもらっている客の後姿が写っている。その人の頭は後ろが丸く禿げている。煌々たる満月ではなく朧月である。なおもっとよく見たくて私は自分の頭を左へ曲げた。すると今写っている朧月も左へ曲るではないか。アラと思って頭を真すぐにすると、朧月もまた元通りになる。何と写っている朧月は他人ではない。まぎれもない私の頭である。この理髪店は四方が鏡でしかも、正四角形でなく、いびつである。それが為私の頭が合わせ鏡で見せられているのである。女でない私は合わせ鏡を使ったことがない。決して房々した髪だとうぬぼれていないが、まあこのくらいの薄さならと思っているところへ嘗て見たことのない見にくい朧月を見たのである。ああ我れ老いぬるかな、まだ女の人に好かれるかも知れんと思っていたが、余りにありのままの姿を見せつけられ、ようまあ男前振って歩いていたことと、がっかりしたのである。

私も齢六十を越した。しかし今は六十は老人の中に入らない。六十代で死ねば途中死である。どうしても八十前後まで生きねば天寿を全うしたとは云えない。若本多久志氏、吉田圭井堂氏とは同年齢である。この両氏の若者をしのぐ活躍振りはどうであろう。事業に社会的活動に其他あらゆる方面にファイトをわかしていられる。私はそれを見ていつも教えられ、鞭打たれている。何負けるものか、もう六十でなく、まだ六十だと頑張っている。しかしながら、一面やはり体力にものの考え方にやはり齢は争えない一面が確にある。私はこの両面の己を知って、すべての事柄、問題に偏り過ぎることなく、考え行動してゆくことが私

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス
積水化学
本社 大阪市北区常盤町1

の処生方法と思っているのである。

富田林にある富柳会の句会に出席した時である。或る会員の一人が、「梅里さんの川柳はやさしく、おだやかな句が多いが、同じ兄弟でも好郎さんの句は云ってみればズバリ一刀両断型である」と批評された。その時はそうかいなと思っていたが最近私は川柳塔に

芸者一代私生児だけ遺し

という句を投句した。この句を路郎先生は川柳雑誌上にとり上げて、

「ズバリと芸者の一生にメスをあててあますところがない。それにしても詩情がない、稀薄だ。」

と評された。さすが名鏡である。私のありのままの姿を写して下さった。たしかに私の句は感覚が古く、経験の句をものにすることには私なりの句があるが詩情がない。

子供等が待っていますと妻の文　好郎

この句に対しても先生は

「この妻どっかに封建性の匂いがする。もっともっと待っているのは自分なのである。日本の在来の女性の真情をつかんだ句だ」

と教えて頂いている。

袂からシテ紐も出す大旦那　好郎

売上げを一寸のぞいて主人出る　〃

こんな一世紀前の感覚の句が私には多い。

式すめば別居どころかこき使い　好郎

たしかにズバリ派であって詩情がない。

私には蕉風子、夢虹両氏のような若い詩情豊かな、感覚の句はとても作れない。水客氏の如き、軽妙枯淡な句は作れない。若し強いて作ってもただ模倣であって句にならない。あくまでも私は人生経験の上に立ってのズバリ型でなければならない。しかしそれだけでは短詩文学の全てではない。私の句を離さずに、そして一歩進んで新しい感覚の句、詩情のある句も理解し、軽妙な味のある句も含んだものを作句するよう稽古することが私のこれからの進む道だと思っている。

句会ほどすばらしい道場はない。常に句会という鏡、良き指導者という鏡によって、己の真の姿を知り、色の黒いものは黒いなりに鼻の低いものは低いなりに、生かし、より良い句会を作り上げてゆく稽古に励まねばならない。

稽古とは同じことをくりかえしくりかえし習得することである。

同舟近詠

大阪市　麻生葭乃

終点のない電車みたいに歩いて来た
テレビの知識孫にまで先越され
グランドピアノも今はひらやの斜陽族
会計係観念をしてけちけちし

大阪市　橋本緑雨

がんばってくれと長生たのまれる

長野県　高峰柳児

熱かんへ役得いきなりむせている
蝶タイでせめてはったりきかせてい
入籍をまだ運べない姫婦服
媚びる裏マダムそろばんはずさない
子を堕す始末へ若さ悪びれず

和歌山市　秋月安方

子の嫁がとても巾とる世にかわり
自家用車百姓してるとは見えず

南紀白浜に遊びて

草原に牛は苦労を知らぬ顔
方言の一つ二つをメモにとり

大州市　米沢暁明

そんなこと言ったかなあと社長逃げ
運のいい奴よ繰上げ当選し
お手盛りはついでのようにすぐ決り
山と水ぴったり寄りそいいい眺め

今治市　月原宵明

松山の暴力団

坊ちゃんの街ロケでない弾丸の音
わが村はダムに没せん郭公鳴く
上役になればなるほど腹減らず
買物の苦労も知らぬ主婦連の
開発へ鯊の住めない河となり
ビクターの宣伝のよう百合開く
下積の頃の健康なつかしく

名古屋市　長谷川鮮山

家賃と食費それで残せと云うが無理
小人のすぐ前歴を云いたがり
示談屋をこちらも入れてやる気なり
現状も知らず外車を買うと云う
若すぎるマダム女中がまた変わり

コーヒの味
モダン川柳
心斎橋大丸北の辻東へ
御門
TEL (270) 6684
御集会には階上を御利用下さい

魚住満潮　大阪市西成区玉出本通四ノ六
〃
久家代仕男　島根県平田市灘分町一八二二
大阪逓信病院
烏ケ辻川柳会
会長　足立春雄　〃　桝本路児
若林草右　田中敏行
市場没食子　中谷ハナ子
西辻竹晴　水谷竹荘
西口竹志　木村よしを
古谷まさる
生越正徳　幹事　北川春巣
銭谷かおり　〃　半田夏生
小沢史葉　〃　堀風仙洞
〃　森下愛論　会計　橋本幸男

芭蕉庵桃青

―古俳句と古川柳（二）―

冨士野鞍馬

芭蕉庵桃青は、本名松尾宗房、通称甚七郎又は忠右衛門といった。正保元年甲申（一六四四）伊賀上野赤坂町で生まれた。はじめ藤堂家に仕えたが、寛文六年（一六六六）京都へ出て諸学を修業した。俳諧はそれより前二十才ごろからはじめたらしい。

名の高い芭蕉は蔦の中を出る
（宮四23）

替りもの蔦の中から芭蕉出る
（二九18）

蔦は藤堂家の紋である。

寛文十二年（一六七二）江戸に下り、所々転々して、深川六間堀に居を定めたのは、延宝八年（一六八〇）であった。翌年門人李下から芭蕉を贈られたので「芭蕉庵」と号したのである。

人口に膾炙されている

○古池や蛙とびこむ水の音

は、自書の「貞享丁卯詠草」の中に記されてある。丁卯は貞享四年（一六八七）で、四十四才の作ということになる。

江戸川柳は、この「古池や」の句について、色々に詠んでいる。

古池へ其後とびこむ沙汰もなし
（九〇39）

古池は世界にひびく水の音
（三九26）

一つ宛蛙を仕舞ふ水の音
（一二29）

古池のぼちゃんが末世迄ひらき
（五〇17）

蛙飛ぶ池はふかみの折句なり
（六25）

床の間の古池ほめる身も蛙
（七三32）

と譬え、

芭蕉翁ぼちゃんといふと立ちどまり
（一七34）

音のした水へ翁の影うつり
（八三24）

風流の始翁へどろが刎ね
（一五一8）

古池のそばではせをはびくりする
（二二26）

道風は目で見桃青耳できき
（五三5）

道風は眼で見翁は耳できき
（九〇23）

などとうがっている。また、

ばせを庵やぶれかぶれの人は来ず
（六一24）

古池の近所に稲の翁神
（一一六25）

と芭蕉庵も詠まれている。そして「おきな」と尊称され

俳諧の三番叟にも翁の句
（九一5）

の句であり、

師弟の名吟古池や夕立や
（一五一27）

弟子の其角が「夕立や田を三めぐりの神ならば」と雨乞いの句を吟じたことも有名である。

「古池や」にもじって、

ぬかるみへすけん飛込水のおと
（拾四）

ぬかるみへ座頭とび込む水の音
（四七5）

干見世へ飛込んで買ふばせうの句
（七五19）

けちなことす見とび込水のおと
（三〇25）

古い木や買ず取込むけちな湯屋
（一三九19）

ひやかして買ず飛びこむ水溜り
（六五30）

呉服屋へかはず飛こむにはか雨
（九九4）

とまたおもしろく作られている。

この句について「嵐亭俳話」に「呉融の廃宅詩、放魚池涸蛙声聚といふより案を求め給ふ也しも知られず」とある。

○はなのくもかねはうへのかあさくさか

この句も「貞享丁卯詠草」にあり、これも三体詩の「山城雨翳鐘」の飜案であろう。人口に膾炙されて、これにもじった川柳がまた多く作られ、

貸付けのかねは上野か浅草か
（一四四8）

かねは上野か浅草か五両一
（八九34）

と高利貸の金に洒落、

暑中御伺

川傍柳初篇研究グループ

昭和三十九年八月

幹事 川端柳風 東京都渋谷区本町二ノ四六

整理 高須啞三味 東京都港区芝南佐久間町一ノ五二

共述 前田喜代人 下関市入江町一〇二

岡崎重義 福岡市東緑箱町二ノ二五四

清博美 清水市入江町二一九四

藤井和雄 宇都宮市西大寛町二四四九

指導 丸十府 東京都豊島区巣鴨六ノ一九八〇

補導 岡田甫 東京都新宿区戸塚町一ノ四四八

東京都中野区鷺宮一ノ八四

阿部佐保蘭

名古屋市西区米田町一六

長谷川鮮山

電話(54)九〇四五番

よし町のかねも上野か浅草か
（四三5）

芳町陰間茶屋へ落ちるカネは、
僧侶客が多かった。

土手を行く医者は上野か浅草か
（六四29）

化けて来た医者は上野か浅草か
（四六26）

医者に変装して吉原通いの僧侶
仏師屋の客は上野か浅草か
（ケイ二二）

これも僧侶で、
鐘は上野か浅草かけちな晩
（笹四14）

と吉原でふられ客も詠まれている。

○いざさらば雪見に転ぶ所まで

向島長命寺にはこの句碑があり、「芭蕉雪見の旧地」と記るされてある。川柳はこの句にも興味を持ち、

長命の寺なればこそ翁の碑
（八一20）

梅も芭蕉も塚に成る向じま
（一一二28）

とその碑が詠まれ、梅は木母寺の梅若塚である。

転ばずば翁の雪見はてがなし
（六四1）

雪にもふ足跡の有ばせを様
（五九6）

すべらずばばせをしなのへ行つもり
（三一29）

十徳の雪うちはらひうちはらひ
（二四112）

膝や手をはたいて翁かへるなり
（二五20）

などと芭蕉を想像して作られ、

わざところびに出たよふな名句也
（三九36）

ころんでもよごれねえのが名句也
（三一15）

と句を讃えている。

師は寒さ弟子は涼しい名句也
（九七40）

十七で師匠は転び弟子はぬれ
（一三四9）

雨にぬれ雪に転んで名が高し
（五九29）

これもまた、其角の雨乞と併べて詠まれている。またもじった川柳に

雪でころんだ疵へはる芭蕉膏
（一一六7）

いざさらば月見に呑る所まで
（五四45）

雪見には馬鹿と気のつく所迄
（二六18、拾四）

雪こかし道手のしかるところまで
（拾八5）

等がある。

○八九間上で雨ふる柳かな

は、「続猿蓑」にあり、この句の文句取りに

八九間上で雪ふるはしにまち
（安四鶴4）

八九けんつづきへぎ王ぎ女が来る
（安七桜2）

がある。「紙王紙女」は橋町の踊子の観劇であろう。「八九けん」はその桟敷をいう。

○あなむざんやかぶとの下のきりぎりす

これは、元禄二年秋、奥の細道で、寿永二年義仲の火牛の謀で平家十万が全滅した倶利伽羅谷を詠んだのであるが、川柳は、

あなむざんや兜のなかの牛の角
（一一一2）

むざんやな階子の下のぞうり取り
（八五18、拾四）

と詠んでいる。

○道のへの木槿は馬にくはれけり

は、貞享元年野晒記行の馬上吟であるが、それをもじって、

煮売屋の柱は馬に食はれけり
（初4）

居酒屋の柱は馬に喰れけり
（九四23）

と作られている。

○蓬来にきかばや伊勢のはつ便

これは元禄七年の歳旦吟である。それをふまえて、

蓬来に積ばや伊勢のかざり海老
（七四6）

がある。

その年十月十二日、芭蕉は大阪南御堂前花屋仁左衛門方で終命の直前の絶筆という、

○旅に病で夢は枯野をかけ廻る

に対し

句たつ者な辞世枯野を駈廻り
（七八22）

新そうの夢は廊下をかけまはり
（拾八6）

という川柳がある。

大阪で客死の芭蕉は五十一才であった。

ビニールのすだれ
昭和の風が抜け
金鶴商 菊沢小松園
大阪市阿倍野区王子町三ノ三四
電話大阪(六)六四四番

男冥利腮の奥まで
風致地の風
諫早市裏山風致地
千理眼堂内
川岡霊眼子

南海電気鉄道株式会社
川柳部一同

樋口舟遊
西宮市鳴尾町一ノ一五八

星川行人
西宮市池田町五六

浅川八郎
富田林市彼方三三一

人生譜

河野春三選

姫路市　時実新子

夜を乾く唇　冷蔵庫鳴り止まぬ
自己凝視　わが指にある長短か
心に似たる深夜のデパートを歩く
生きていることの愉快に崖がある
友を数えて葬列はそこでとぎれる
火の夢に汗してはたすあかつき
夏至の日の心に人の死が坐る

兵庫県　常岡孝風

バカ馬鹿　愛を望楼から捨てる
おんな女　歴史始まる位置を占め
たくましい愛　森林の奥深く
水の変化明日は情事を捨てるのだ
水族館神話広げる世は辛い
墓の数ぼくを葬る場所がない

大阪市　瀬古南紀郎

学校の裏手はたのしけさも行く
敗っぷり知らぬ生れの美しい
天瓜粉父若ければ母若し
犬散歩五町五町の土を踏む
吊皮に今日生くる五指たしかなり
母と子の心のすきへ勲章め

豊中市　林夢虹

バラくづるその夜少年突如死す
少年大志部厚き辞書を持つ
少年非行童話を今日も返本す
小女汚され少年悪徳政治家となる
少女恋風見は風の方を向き
少女嫌悪父の靴下触れもせず

大阪府　早川清生

県立高校　街へ逃げ出す子を育て
まわる鶴舎いのちはすでに産む機械
泊るホステス故郷の屋根は石を置く
刈りて敷くときにもっとも麦ひかる

在日鮮人

外人手帖デートに忘れてはならず

大阪市　橘高薫風子

男の子欲し吾が為し得ざること多ければ
人魂を見し少年の夏夜にかえれ
指揮者は少年　虫の管絃楽
零落に少女の乳房熟れてくる
ああ日本　童唄なき国となる

大阪市　岡崎青塔

馬鹿ながら墓参りだけするという
銅像の今はこそばい足の裏
泣くことは知らぬに非ず生きてきし
むしタオルいづれへ去りし青春よ

西宮市　末沢花美

憂積の思い曇天の空仰ぐ
すり切れた手紙の言葉烈しかり
三十路なり美男の甘さ軽く見る
ちゅうちょなく真紅のバラを撰ぶ日よ

羽曳野市　戎川太郎

傷心の影長く夜汽車待つホーム
心急く夜汽車の軋み胸を裂き
理想像　鏡に歪む時代なり

つらぬいた壁を男はふり向かず　玉島市　水粉千翁

毛筆の重味すらすら打ち開ける

靴音を呑み込んで待つ妻が居り　玉島市　井上旭峰

咳一つない病室の花が枯れ

ふと易へ心動いた日の焦慮

差上げた双手に余る空の青　大阪市　今西章雅

後尾車の哀愁鉄路の旅光る

バラ色の夜はふれない日記帳

佐藤春夫急逝

詩心不老逝くとも知らず美神の句　京都市　室井八九寸

思いあがり露骨なタクトなくもがな

霊柩車に乗りそこねたる傷痕よ

カナリヤに胡瓜しかない日が続き　今治市　月原宵明

さめざめと泣く鉛でなしアイシャドウ

ネグリジェ牛乳のんでからも寝る　小松市　関戸宗太郎

勲章をサンドイッチマンへ貸して悔

母のいう女らしさをもてあまし　仙台市　日東里

趣味の欄煩悩二つ三つ書き

美人系説いて神代へさかのぼり　金沢市　根上杏花

赤旗の手入れもなって夏攻勢　京都市　松川杜的

出勤三十分前に起きて父の着物　岡山県　永宗宗義

コスモスは倒れたとこで花をつけ　倉吉市　奥谷弘朗

嘘ついた後の孤独を噛みしめる　仙台市　平野光道

ふるさとの歓はやわらかく吾を刺し　大阪市　和田旋鳳

巨象も泣くかインドの光ネール逝く　京都市　大久保和三郎

乱視鏡心にかけて世を生きる　大阪市　西本保夫

天衣無縫住友マンも居るに居る　羽咋市　三宅ろ亭

独学の悲哀誤読を指摘され

東野大八著

流風

人間横丁

B6型　二五八頁

価二五〇円

送費七〇円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄い、まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

橘高薫風子著　麻生路郎序

川柳句集

価二五〇円

送費六〇円

▼著者は新進作家で、繊細な新感覚の持ち主である。川柳不朽洞会に入って揉まれ、川雑編集部員として精進を続けている前途ある好作家である。

発行所　川柳雑誌社

大阪市住吉局区内万代西五丁目二五

振替口座　大阪　七五〇五〇

電話大阪　(67)　六〇八一

柳誌のあり方批判

（月評）

長野笛朗

1

柳誌も、御多聞に洩れず遅刊も多いので、批評する側にとっても、批評する雑誌の時期的のズレがあって、同じ時点での比較批判がむつかしいんだよ。従ってこの記事も七月号や六月号やひどいのは五月号あたりをひろげていて、トンチンカンな気持がする。今月は一寸革新派とやら申す一派の柳誌を拝見して見るかねえ。

「しずおか」第十号。ここは小泉十支尾という「川柳研究」の同人だか、幹事だかとに角三太郎の門下が独力で出している柳誌。発行所も静岡川柳研究社とある。この人、昔は「川柳山脈」とか「現代川柳」とか出していて、いつの間にか柳壇から消えてしまったと思ったら、昨年の夏に突如「朱の日々」という句集を出したが、その「あとがき」で「今後再び以前のように句作の道に入ることは恐らくない」といっているのに、どうしたことか、焼けぼっくりに火がついてとうとう「しずおか」再刊にふみ切って月刊を守っているのは感心。十支尾の句はいわゆる流れる抒情というおセンチで、ここの一統には女流が多くて、作品も甘いものが多い。甘いもの必ずしも排撃すべきではないが、本物の砂糖なら結構だが、サッカリンが多くてはねえ。缶詰ではないが、人工甘味併用という奴はやっぱり値段が易いときまっている。今号の巻頭は中村富二だが、この作家、技巧も表現も独自でその癖魅力という作家にとっての不可欠の要素をもっているのは大したものだが、ひとりよがりや、表現の堂々めぐりで、又かと思わせる底の浅さも否定出来ん。今度の〃せなか〃も正しく富二の烙印にいつわりないが、少々おふげさがないでもない。

放火魔はダレだ　芳味を木で創る
哲郎を創り蕩寸が消えた、ダレが消え

なんてこんな茅屋落ちは、現、川、連の人たちが見たら、ハハアンと分るが、作品は一般鑑賞者に見せるもの。どうかと思うネ。尤もその一連の句の中に、太宰と、直哉と荷風が織り込んであってカモフラージュはしてあるがねエ。

大多和一粒という作家の句を見たまえ。

星が夢を流すから女に涙がある
ビニールの中でしか咲かぬ命
二千年たってもミロは美しい
全くこの甘さ、苦労のなさ、抵抗感のなさ、――こんな句なら伝統誌の方にもっとしっかりした作品がたくさんある。新川洋洋という人が「新子の感覚について」というエッセイを書いている。たしか「せんば」にも、細々と新子の用語を分類して統計をとっているのだが、全くわずらわしい。科学分析も結構だが、何だか、時実新子を手術台にのせて、二たび三たび、解剖しているようで、何故こんなにまでしなければ気がすまないのかと学者など分らんよ。

こんな研究家(?)がいると、うっかり句集も出せないネ。呵々。

あすなろ（五五号）秋田県から出ている尖鋭誌。「しずおか」と共にタイプ印刷だ。ここの主宰の伊藤拍車が石川富史という人にバトンを渡した。石川富司の「川柳講座」というのが巻頭にのっているが、これが拍車から受けついでの講座なんだが、どうも学校の講義をきいているようで、葉桜の頃には全く眠くなるしろもの。今回は〃自然主義と川柳〃という項目なんだが、長々と述べられた明治期の自然主義文学運動と一体川柳とはどういうかかわり合いがありどんな影響を与えているのか、その辺が書かれてないので退屈な読み物でしかない。尤も（以下次号）となっているので、次号で、その辺の解明があるものと一応期待しておこう。

作品を拾うと

樹氷の幻覚からワルツが流れる　樺一陽
男の顔が裂けて深層海流が見える　同

一体これが革新派とやらいう川柳なのか。この浅薄なコトバだけの歌に何があるというのか。樹氷の幻覚や深層海流が作者の想念と密着してないんだよ。こんなのを新しがりというのか。思想なさと

暑中御伺
川雑
玉造支部
一同

友淵貴山
大阪府泉北郡高石町北五〇六

傍島静馬
高槻市藤の里三四

後藤梅志
大阪市西成区玉出新町通一丁目一一
電話大阪六五一局五五三二

川柳雑誌社ハワイ支部
ウイロー社
同人一同

いうのか、コトバの麻酔というのか。とに角擬似革新川柳だねえ。快便を学生デモの記事で拭く　石川富司

この人の頭をうたがうねえ。これが社会性川柳というのなら、諷刺性というのなら、僕など革新派とやら願い下げだねえ。

「不死鳥」（七月号）

静岡から出ている革新誌。今売出しの新鋭中野柳窓、石川重尾、服部たかほと古参の稲村雀穂、それに貝塚千加夫が最近に加った少数尖鋭誌。作品では中野柳窓が一番よい。先達っての現川連賞では惜しくも佳作になったが、誰かの評のように、たしかに当選作の河野春三作品よりも、この人の作品の方が、光っていた事は月評子も認めたい。

勿論最近この誌の同人連中少し沈滞気味で、作品の発表も意欲的でないのが惜しい。服部たかはも、曲り角に来たようだ。口語川柳のマンネリは文語のそれよりも一層の倦怠を覚えさせることを自覚してほしい。

この雑誌は、「しずおか」と共に自社の同人がエッセイが全然書けないで、他からの批評を乞うている態度が情けないと思う。俳誌を見たまえ。前衛といわれる位の作家は誰でもエッセイの一つ位は書いてますよ。勉強が足らんと僕は思うねえ。あまり叱言ばかりいってると八方から恨まれる由であるがどうも性分でねえ。うそはいえないんで困る。そのうち、ペタ賞めさせてもらうような柳誌に出会して見たいよ。お互いに。

現代柳人録

(269) 槇　紫　光

(一) 槇芳明（二）紫光（三）(四) 愛媛県周桑郡壬生川町川新田富士紡社宅（五）大正十年四月十八日（六）愛媛県周桑郡三芳町三芳（七）工員（八）――（九）**淋しさを女は躾じゅうで見せ**（一〇）――（一一）有（一二）昭和三十年六月

(270) 関　戸　宗　太　郎

(一) 関戸宗太郎（二）宗太郎（三）――(四)石川県小松市上寺町二八（五）昭和二年二月十三日（六)石川県小松市上寺二八(七)会社員（八）小松（二二）七八七五（九）**呉服屋の世辞まにうけて若返り**（一〇）柔道・相撲（一一）有（一二）昭和三十二年三月

(271) 関　水　華

(一) 関晶（二）水華（三）丘隅庵（四）横浜市磯子区杉田町三番地（五）大正二年十月十二日（六）山梨県山梨郡春日居村桑戸（七）神奈川県立図書館視聴覚課長（八）横浜㉓八六三五（九）**美しい握手狸へ月が出だ**（一〇）郷土資料収集・テニス・映画評（一一）有（一二）昭和三年四月

(272) 鳥　取　周　甫

(一) 鳥取志げ（二）周甫（三）――(四)岡山県鏡野町竹田(五)明治二十三年九月一日（六）岡山県鏡野町竹田（七）農（八）――（九）**達筆をほめられ代筆とも言えず**（一〇）生花・読書（一一）無（一二）昭和二十七年

金泥集

選乃葭生麻

「遮断機」

春なれや遮断機に舞う蝶の恋　河茶
遮断機が下りてよかった忘れ物　同
遮断機にグズの私がのこされる　同
遮断機が下りて急行乗りおくれ　同
遮断機のある踏切へ遠まわり　同
遮断機のない踏切に月見草　一栄
停年へ遮断機下りた気持なり　同
遮断機が星の味方をするように　同
笛吹いて遮断機の役もバスガール　同
遮断機のある踏切で事故に逢い　同
母の目のけわし遮断機の役もする　清子
遮断機へシグナルの赤助勢する　同
遮断機へ急救車も仕方なく止り　同
出勤のあせりへ遮断機平気なり　同
気の弱いのが遮断機へまた残り　きさ子
遮断機へ野良犬やはり心得る　同
遮断機の向かう喧嘩をした税吏　同
遮断機へ牛もねむたい顔を出し　徳子
遮断機でゆっくり待たす長い貨車　同
遮断機のベテラン旗振り五十年　同
夫婦にも遮断機降りた日もあって　美喜
遮断機へダンプカーもおとなしく　同
遮断機を犬と一緒に待つ散歩　同
犠牲者が出て遮断機がやっとつき　酔夢
遮断機が降りて尾行がふいになり　同
遮断機に向かい合った貸と借　同
追うて来た子は遮断機の向う側　勝子
出勤の時計遮断機気を揉ませ　同
霊柩車もダンプも遮断機共に待ち　同
キシを追うポリに遮断機みかたせず　周甫
口笛がせわし遮断機待っている　同
人の気も知らずに貨車はのろのろと　美代
遮断機が下りた所で追いつかれ　同
ローカル線遮断機もなく事故もなく　みさ子
犯人の車遮断機おりて見失ない　同
かえりたい過去へ遮断機おりたまま　有子
許されぬ恋遮断機を下すなり　すみれ
ダンプカー遮断機なんぞ目もくれず　トラ子
遮断機を拝んで通る老ごころ　千夏

次回題「制服」〆切八月末日

米沢暁明
愛媛県大州市常盤町九一番地

岸和田市野田町一七五
高橋操子
電話岸和田貝塚②六六三一

川雑玉造文部
西田柳宏子
牛島水京
城一舟

山田季賛
山田スミ子
大阪府高槻市西五百住三五ノ四七幹線アパートB一〇二

一路集

選者
若本多久志
長野文庫志
本多柳志

階級

若本多久志選

階級の悲哀下座で酔いつぶれ　可住
本社から来て別格の座に据える　涼人
星一つただそれだけで酷使され　ろ亭
階級の重さこたえる定年期　弥生
階級を意識する恋の果かなさよ　野迷路
階級でお辞儀のしかたまで変り　句楽坊
特権が今日も他人の酒を飲み　代仕男
上役にさからいなやと念をおし　秀峰
何さまの邸か塀のしらじらし　滋雀
階級を付けてリンゴを光らせる　李鳥
階級が知れる女の軽い口　井蛙
寄付金の順で招待席をきめ　光郎
呼び捨にされて楽しいクラス会　宗太郎
白骨にも階級がありでかい墓　章雅
階級と別に特技のある強味　圭水
階級が人生観まで変えてゆき　伊久野
税務署で儲けに階級つけてくれ　隆史
搾取階級に労働の神聖教えられ　光道

パパ何等兵だったのと訊かれ　愛鳩
階級の順に焼香さす愚か　九呂平
階級のないグループの人間味　同人
階級があって浮世が面白く　進之助
今も尚軍曹殿という態度　吉備郎
階級も忘れて二人愛強し　晃男
階級差つけて春斗けりがつき　たけを
階級は上った車はまだ買えず　恵二朗
上役は飲ませにゃならぬ金も要り　雅城
階級も意識せぬ程酔いつぶれ　独仙
焼香もやはり階級順によみ　初甫
階級は跡形もなし九段坂　千翁
階級に強い隣りも同家賃　旋鳳
階級が上り友情薄くなり　藤波
階級章子はワッペンかと思い　十九平
女の階級ハンドバッグを見較べる　不二
階級だけ上りサラリイそのまんま　杏花
階級へ未練などない齢となり　松風
親睦会夫の階級順に座し　隆子
一階級上った中元高うつき　宗義
二階級特進首の座にすわり　日東里
五客

階級はここにもあった牢名主　桂仙
社長へも平へも板前ただ握り　淀月
人間がきめる階級金くさし　和三郎
考える階級となり耕さず　八九寸
殉職が涙で受ける二階級　旭峰
人
階級を言わず床屋に順があり　木魚
地
うたかたに似る階級を血で挑む　和三郎
天
月給の順にならんだ月見かな　弘朗

頬ずり

長野文庫選

頬ずりに母の愛情ほとばしる　半月
頬ずりをして添寝の母そっと起き　伊久野
徳利に頬ずりをして飲み足らず　千翁
人形へ頬ずり園児のママの真似　隆史
頬ずりにハッピーエンドの幕となり　光道
再会の頬ずり涙でぬれている　愛鳩
頬ずりをしてからおむつ替えてやり　たけお
ねむる子に頬ずりをする若いママ　歌子
頬ずりへ犬は不遜の顔でいる　圭太
赤ちゃんに頬ずりしつつ母想う　句楽坊
飼猫に頬ずり孫独の日の長さ　勝子
頬ずりはもう嫌らしい男の子　木魚
ママと児へ頬ずりパパのご出勤　独仙
頬ずりへ目を細めてる娘は五才　杏花
頬ずりをする程寄せている密談　古心
頬ずりが寝た子を起す破目となり　隆子
母さんの味方になって頬ずりし　不二
ホーレン草の鑵に頬ずりしてボバイ　春己

明治・大正 柳誌巡礼

奥津啓一朗

大正十四年十一月十日、覆面、創刊号、菊半截四十二頁、神戸市北長狭通八丁目九七、覆面川柳社発行、編集発行人神戸市元町四丁目七八、三条東洋鬼、一部拾銭。

三条　東洋鬼

独り寝の寒さ淋しさ虫を聞く

古沢清公子（道を求めて）創作、創立句会報等が載っている。

「川柳は狂句と同一に非ず」と宣伝し、世人の誤解を解く為めには狂句に非ざる程度の句を数多く作ってさへ居ればよかった。

然し既にその時代は過ぎ去った。世は尊き文芸としてた川柳を要求して居る。

（中略）

覆面は我々のあらゆる感じを、あらゆる境地より川柳にして今迄限ぎられたる感ある川柳境地より飛び出す。覆面の前には伝統的な川柳用語も境地もない。我々は裸体にて自由に調和せるリズムによってうたう云々

とは創刊の辞の一節。

同人は古沢清公子、藤井梟柳、佃嶺月、三条東洋鬼、大正十五年四月十五日発行の第四号（四六半截判）以下不明。

因みに高須啞三味氏よりの御来示も四号迄、どなたか御教示ください。

□

大正十五年（一九二六）

一月二十日、柳嶺、第二十三号菊判十六頁、岡山市上石井岡山運輸事務所内川柳二葉会発行、編集発行人長尾秀雄、一部弐拾

頬ずりに破止場の役人目をさらし　九呂平
頬ずりをして妻の手に子を戻し　井蛙
頬ずりをえくぼで返す子に育ち　初甫
すり寄せた愛情の頬へ犬の舌　八九寸
頬ずりをした髯づらに泣き出され　光郎
人形へ頬ずりやはり女の子　章雅
頬ずりをすれば笑顔で子が答え　藤波
欲求不満猫に頬ずりして掻かれ　滋雀
ひしと抱き頬ずりあやすも母性　繁太郎
抱き上げて頬ずり出来る幸福さ　弘朗
頬ずりを嫌って祖父の膝を逃げ　桂仙
片言に頬ずりをする顔が溶け　和三郎
頬ずりへ子は安心と言う寝息　進之助
あでやかに獅子と頬ずり美女の芸　万竿
父ちゃんの髭頬ずりに痛たがられ　晃男
頬ずりへ誰にも負けぬ母性愛　雄々
頬ずりをもう喜ばぬランドセル　淀月
頬ずりのまた泣かしてる父のひげ　同

五　客

頬ずりの頬を涙でぬらしあい　どんたく
頬ずりをすればお乳の匂いがし　静水
頬ずりをしてしまわれる貯金帳　李鳥
オーバーな表情頬ずりして示し　十九平
わが馬へ騎手頬ずりという愛撫　旭峯

人

頬ずりへ赤ちゃん迷惑そうな顔　圭水

地

人形に頬ずり寄せて一人ごと　代仕男

天

頬ずりの歓迎ハワイの陽がまぶし　恵二朗

軸

頬ずりを嫌がり出した羞恥心　

禁酒

本多柳志選

宴会のたびに禁酒の訳を言い　初甫
ガタが来たからだに禁酒もう遅い　独仙
ガムや仁丹禁酒の口が忙しい　八九寸
禁酒とも言へず社長の盃をうけ　宗太郎
盗人の様にくぐった縄のれん　千翁
明日からは禁酒と決めて酔いつぶれ　日東里
飲み仲間禁酒したのを淋しがり　弘朗
上役をなぐってからの禁酒なり　同
禁酒して見てもどうせは足らぬ金　秋月
お見限りですねと禁酒の背をたたき　勝子
禁酒したはずの部長とバーで会い　旋鳳
禁酒して築いた富を子に飲まれ　藤波
条件は禁酒当分元の椅子　同
禁酒したけれど洋酒のカレンダー　春己
禁酒した社長マダムにさげすまれ　十九平
信用はまだ早すぎる禁酒なり　木魚
冷蔵庫禁酒してから広くなり　李鳥
禁酒したいきさつのあった過去　弥生
今日かぎり今日かぎりと一生飲み　句楽坊
禁酒して見てもやっぱり火の車　代仕男
あさけりの目が禁酒の嘘を知り　滋雀
長生きをする気になった酒を断ち　静水
明日からの禁酒へマダムいい返事　新雪
禁酒した意地を社長に認められ　涼人
肝臓薬のみのみ禁酒出来ぬ地位　可住
禁酒する誓い一晩寝て忘れ　保夫
禁酒してからの夫がもの足りず　和三郎
禁酒する決意はいつも持ちつづけ　雄々
禁酒してからの世間がせまく見え　淀月
禁酒する条件結婚申し込み　どんたく
禁酒宣言退院して忘れ　吉備郎
末席でジュース貰って小さう居り　万竿
無意識に盃もっていた禁酒　愛鳩
また禁酒ですかと妻にひやかされ　光道
禁酒した事を笑うて腹の虫　進之助
ブドウ酒も駄目かと医者にくい下り　酔夢
禁酒すりゃ女房あれ買う之買うの　圭水
禁酒して食事の早い味気なさ　隆史
監獄に入らねば酒はやめられず　雅城
禁酒どころか飲まぬ夫で気が疲れ　章雅
禁酒してうさの捨て場が見つからず　恵二朗
禁酒して居るのに行かへんか飲まへんか　宗義
禁酒した月から宴会ようつづき　不二
禁酒してからは叱言が多くなり　同
禁酒してよかったよかった顔のつや　杏花
禁酒した人を百薬嘲笑す　古心
家庭では禁酒他所では飲んで居り　旭峯
禁酒して妻子よろこぶ冷蔵庫　同
禁酒してジュースの味を舌に入れ　松風

五　客

禁酒した訳誘惑は信じない　辰始
禁酒もう取消にした猪口をうけ　伊久野
このうまい酒までやめて早う死に　光郎
禁酒さす事で大トラ貰い下げ　井蛙
花があり月あり禁酒のびにのび　酔夢

人

禁酒してまでも浮世にしがみつき　日東里

地

禁酒していない聴診器に知られ　九呂平

天

禁酒してからのお酌の美しさ　野迷路

軸

賛成はしたが禁酒へふみ切れず　岡村一知

銭。

挨拶を隠居炬燵へ引寄せる　藤原桜夢

鼻先へ花王を当てて剰銭を待ち　長尾風来人

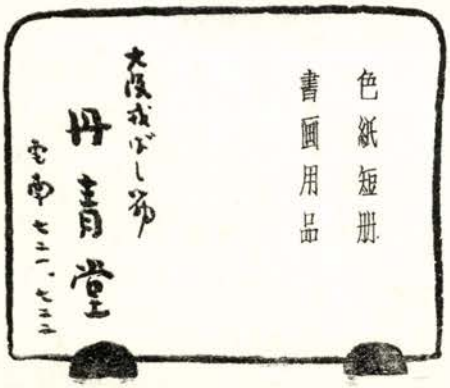
友達の恋を冷たくあざ笑ひ

一家吟（雑詠）亀山宝年坊選、募集吟岸本水府選（宵）小林不浪人選（撥溜）高木夢二郎選（評判）外に高木夢二郎（漫言）等が載っている。

梶原傘花丘の〝幻影を紡ぐ〟は明治岡山柳界の消息を伝えているのでいずれ機会をみて紹介する。

同人亀山宝年坊、馬場亀郎、岡村一知、金久出句坊、片山いわを、横田四三坊、伊達達郎、滝川竹郎、長尾風来子、乗越黒ン坊、山崎寸鉄、丸山木ノ実、福武桂華、藤原桜武、福島千若楽、小山遊公、江川江山人、綾怪公、赤木夢雄、佐武ひとし、森旭仙、末広敦麿。

五月三十一日発行の第二十七号以下不明



柳界展望

唖三味を励ます会

—東京都・松声閣でのメーンテーブル左から鮫馬・三太郎・雨魚・唖三味・迷亭の諸氏（六月六日）

大阪逓信病院川柳会青葉吟行

—奥新和歌浦魚又楼の句宴メーンテーブルの左から路郎師・春雄氏・春巣氏。

句会

▼本社八月句会は既報の通り九日（日）午後一時から大阪府信用金庫会館で川雑川柳ゆかた会を開催、川雑川柳まつり優勝楯返還、永久保持への贈呈式などを挙行する。林家染丸師の落語出席川柳家着用のゆかたの審査など盛り沢山の余興もある故、暑気を吹っ飛ばして柳友お誘い合せの上多数のご出席をお願いする。▼七面短詩文学クラブ川柳部句会（和歌山市）は七月一日（水）午後六時から奥新和歌の浦魚又楼で開催、盛会だった。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）は七月十六日（木）午後六時から難波親和クラブで開催した。▼大阪逓信病院川柳会七月句会は二十五日（土）午後二時から足立春雄会長送別句会を同病院北館五階会議室で開催。▼川雑岡山支部（岡山市）七月例会は十一日（土）岡鉄クラブで開催。▼鳥取川柳会（鳥取市）六月句会は七日（日）川外大工町本浄寺で故増田耕民追悼句会を開催、京都から森本法泉子氏が参加、久し振りに岩田八文銭氏の顔も見え有意義な会であった。鳥取川柳会は会則を改め六月一日に新発足し、会長に大西八歩氏、副会長に河村日満、森田茗人両氏が選任された。▼我楽荘春の川柳大会（名古屋市）は六月二十一日冨士銀行階上で開催され、六十名を越える盛会であった。▼明和川柳研究会（西宮市）甲南川柳教室（神戸市）七周年記念、河相すすむ還暦祝賀川柳大会は七月十九日（日）午後一時から西宮市役所嗚尾支所三階ホールで開催、出席者百五十名を数え極めて盛会であった。▼第七回近県川柳大会（竹原市）は昭和三十九年九月六日（日）正午から本局前森川邸で開催。兼題、一泊・ほろ酔・ブレーキ・餌・見ぬふり・艶・予約・野良犬・みどころ・一代、各題二句、投句は句箋（巾五糎、長さ二十糎の白紙）に明記、五十円封入の上、八月末までに広島県竹原市竹原川柳会宛。▼川柳たけはら七月例会は八日山内静水居で開催された。▼まつやま八月句会は三坂展望台納涼川柳句会を五日（水）午後六時から開催。▼川柳岩手四十一号は特集として「俳句と川柳との接点」宮慶一郎、「短文芸の発展のために」川村誠之進と俳人歌人の評論を掲載。▼五平太川柳会（宇部市）創立十周年記念山口県川柳大会は昭和三十九年五月十七日宇部三和銀行会議室で開催されたが、記念大会句集が六月十四日、五平太川柳会から発行された▼西島○丸句碑建立記念大会号は昭和三十九年六月十八日川柳長屋連から発行された。非売品。▼故食満南北翁を偲ぶ川柳句綴作品集が、六月十五日堺市文化団体連絡協議会から発行された。

日本最初の聖地訪問団

—ローマ法王庁で法王に面接。一行中の中央一番背の高い方が、川柳才杓洞会員唐崎專爺氏

消息

▼北川春巣氏（大阪市）は七月四日附で大阪市交通局病院副院長の要職に就任された。▼橋本緑雨氏（大阪市）は大阪市交通局交助会十五周年記念会で創設以来の功労より感謝状と記念品をうけられた。又、六月二十六日故夫人令嬢のそれぞれ三十年・十八年法要に金沢へ一泊帰郷された。▼吉田圭井堂氏（堺市）は糖尿病と心臓衰弱のため、再度の断食療法を決意、七月八日早朝から断食に入られた。二十五日まで続けられる由。▼工藤甲吉氏（青森市）勤務の東奥日報社の本社社屋が竣工し、六月二十四日落成式を挙げ、五十六頁の新聞（記念特集号）を発行された。▼吉川亜人氏（山口県）は近来ますますお元気で、この程、「久賀小唄」を作詞された。▼梶川蘇堂氏（神戸市）は一月末に令息が不慮の死を遂げられ、大学を出て五年、係長の椅子にあり前途を嘱目されておられたので無念やるかたなく思っておられたが、五月末、令息が亡くなった山、世話になったお寺等を回って来られた。「むさし野のはてなる丘に独り来て亡き子偲ばゆ酒を酌めども」▼川岡霊眼子氏（蕨早市）は、同氏の選による入選句の掲額、縦二尺五寸、横四寸の絵製を氏神の天満宮に毎年奉納されることになった。

諫早川柳文化会の肝煎りで奉納時には納涼句会が開催されると。▼「川傍柳」初篇研究グループ初会合は昭和三十九年六月二十日逗子で開催。岡田青・丸十府・川端柳風・高須啞三味・清博美の諸氏が集り歓談された。▼水谷竹荘氏（大阪市）は七月十四日青森からの便りに、「東北一週、川柳と名物行脚をつづけています。飯坂川柳会の吉田至人氏と川柳談に花を咲せ、東山、花巻、浅虫と各温泉を巡って二十日過ぎ帰阪の予定です」と。▼河相すすむ氏（西宮市）は六月七日の高知市での四国川柳大会に出席、柳友の歓待の中、貸切バスで五台山、桂浜、竜河洞を見物、又、信州出張の途次松本では石曽根民郎さんにお目にかかり楽しいひと時を過し、旅と共に川柳の余徳をしみじみとうれしく感じていますと。▼長谷川鮮山氏（名古屋市）は六月十三日伊勢神宮に参拝、鳥羽イルカ島の太平洋の眺めは格別だと句信があった。「ひと夏はここに住みたいイルカ島」▼吉田隆史氏（神戸市）から、「旅行好きの私は年中旅をしています。八月二十三日二十四日は当地生田神社の夏祭りで、例年通り献灯の行灯へ川柳を書きました。▼米沢暁明氏（愛媛県）から、「七月六日宮崎日南海岸に遊びました。否、実は夏期研修に来ているのです。緋の袴そぞろ宮居の景を添え」▼越智一水氏（今治市）は先般から調査中の（愛媛女性柳人百名）を完了整理中である。▼足立春雄氏（豊中市）は徳島大学医学部教授に就任八月一日赴任される。▼松岡委津浪氏（善通寺市）は市制十周年の祝賀行事として、氏が世話役の善通寺市短詩型ペンクラブ（川柳、短歌、俳句）の祝賀記念句会並に短冊展を開催、短歌は讃岐宮、川柳は地区労会館、俳句は医師会館、短冊展は合同で丸信という相互銀行の一三階で展示、作品は市教委で冊誌にして近く配布される由。「植え終えて青田の風を讃え居る」▼小西雄々氏（米子市）は七月四、五の両日片山津で開催される全国鉄川柳大会へ参加のため三日に出発される。

弔

▼吉田機司氏（東京都）は永らく病気療養中のところ昭和三十九年七月十六日午後四時二十三分死去。告別式は七月二十一日午後一時から二時まで自宅で仏式により営まれる。謹悼。

▼文蟬・土井角太郎氏（川柳不朽洞会常任理事）は胃ガン再発により、薬石効無く、七月二十三日午前一時五分、大阪市西成区松通九丁目二二番地の自宅に於て永眠された。享年六十六才、告別式は廿四日午后一時、松通の円照寺で挙行。謹しんで悼む。（詳報其他次号）

転居

▼小浜牧人氏（神戸市）は神戸市東灘区本山町森丈土三二五光風荘内へ転居された。▼柳生野菜氏（野田芳艸）氏（西宮市）塩瀬町生瀬六五四へ転居された。

住所改称

▼奥津啓一郎氏（東京都）宅の住所が左のように改称になった。
東京都目黒区東が丘一丁目三一番四ー七号

電話番号変更

西いわを氏の自宅の番号が、阪南局（〇七二九五）〇二八四番と変更。

不朽洞会から

☆**常任理事会**—六月二十六日（金）午後七時から川柳雑誌社で開催。
一、川柳ゆかた会打合せ
一、その他
右事項を協議した。出席者は路郎師、好郎・梅里・栞・多久志の諸氏。

☆川柳ゆかた会準備打合せ会は七月十六日午後六時から戎橋北詰キリンビヤホールで開催。
一、実行委員の選任
一、役割の決定、
一、その他
右の諸件を協議打合せた。出席者、路郎師、梅里、栞、いさむ、恒明、多久志の諸氏。

☆**新会員紹介**—六月
☆有仂芳仙（熊本県）正——葭乃女史推薦

▼退会——松下京一楼氏（大阪市）は家事の都合により七月限りで山本一傘氏（西宮市）は二月限で退会された。（多）

不朽洞の人々

西出櫻子製造所の西出一堂さん

玉串へ敷かれますとは言わなんだ

（一栄）

夫唱婦随、婦唱夫随で四十年、世間では鳴天下のように思われている。それは夫の自称愛妻家の宣伝が利いているらしい。私の横好きの川柳を理解してくれているのには内心感謝している。私の余生はこのまま川柳一筋で進みたいと思っている。「振りむけば明治生れの遠いこと」「おばあちゃんの残す名句がまだ出来ず」

暑中御伺

富士野鞍馬
東京都港区麻布宮下町三〇番地の二

橘高薫風子
大阪市北区堂島上二ノ五二

真鍋一瓢
大阪市浪速区塩草町一一五六

幽霊の足跡を見に

玉造・阿倍野支部合同吟行

—— 来迎寺にて ——

守口車庫から京阪バスで十五分佐田天神がある。そのすぐ近くにあるのが吟行の場所として選んだ来迎寺なのだ。幽霊の足跡の伝説を今なお伝え、近頃考古学者達の関心を寄せているらしい。

学者ではないが、我々も川柳的見地から、一度拝見したいものと、思いおもいの想像をめぐらす。

全員が揃ってからというので、足跡の方は後まわし、一通り観察して廻らねば句が出来ないとあって、銘々好きな所を見て廻る。

建立して三百有余年、ろくに修繕さえされていないと見えて、随分と荒れている。廊は落ち、てすりは外れ、畳は何十年も表替えしないと見えて、すり切れてざらざら、後水尾天皇の臨幸の場と云われる玉座さえ、表替えが出来ぬありさまだ。

狐狸ぐらい住んでいそうな来迎寺　一栄

表替えも出来ぬ玉座で有難し　梅里

柵の中玉座は埃だらけなり　薫風子

数々の重要文化財を収めているというのにこの始末、やっと最近大修繕に踏切って槌音も間を置いて聞こえてはいるが、生まれ変わったようになるのはまだまだ先の事。仏様も待ちどうしい事だろう。

重文の仏つめたく放っとかれ　柳志

荒れた建物の哀れさにくらべて、前栽は住持の手入れが行届いているのか、実に美しい。

新緑に包まれた石で造られた、十三重の多宝塔（重文）涼しさに季節を間違えたか萩の花が咲き乱れ新緑の中に色どりを添えている。

白蓮の花だけが廊下に一本淋しく咲いているのが印象的だった。

新緑に裾を包まれ多宝塔　文秋

幽霊のお寺で萩も狂い咲き　あいき

荒庭に白蓮の白うそ寒し　静馬

涼しさに萩狂い咲く来迎寺　柳宏子

全員揃ったところで、いよいよ幽霊の足跡を拝見する。何でも二百十年前、労咳をわずらった職人の女房が病臥中、夫の浮気に嫉妬の炎を燃し、他界しても成仏できず、さまようたあげく、この寺に来て読経中の住持に救いを乞うた、そこで自愛と言う事を懇懇と訓され心の安らぎをあたえられた。そこでお礼に何も残すものがないので足跡でも残して置きますと言って、敷物の上へ立ち、そのまま姿を消したと言うのが伝説の由来だと言う。

皆の眼に何んと感じたか、唯伝説として観賞するもの、うたがいをもつもの、霊を信ずるもの等さまざまだ。

幽霊のエピソード持つ来迎寺　玲人

幽霊の足跡昭和の眼でながめ　小松園

幽霊の足跡妻に見せられず　一舟

幽霊は確かに居った来迎寺　市郎

古寺の伝説信じ寒うなり　文蝶

幽霊の足跡風も鬼気を添え　滋雀

来迎寺科学で解けぬ足の跡　六竜子

一生懸命作句をしていても少しも暑くない。家が少なく風通しがよい為か、気温が五度位は低い。萩も狂咲く位だから、まさか幽霊のせいで寒うなった訳でもなかろう。

お蔭で小便が近くなって入り変わりトイレへ通う。

そこで一栄さんとばったり逢った。どうも幽霊の話を聞いてから暗い所へ来ると、どこからでも出て来そうで、気持ちが悪うて、と言って居られた。

本当に出そうな寺の破れ畳　白柳

（三九、六、一四　文秋記）

暑中御伺

岩崎愛二

京都府乙訓郡長岡町
梅ケ丘二丁目三十八番地
電話京都㊀二九七四番

富柳会

高橋尚史　小路周一　阪口幸吾　岩野日出男　真田博　喜田福寿郎　吉岡美房　滝川林松　松田半月　寺田菊代　飯島青米　森川すみれ　浅川八郎　阿部柳太　八木摩天郎

称酒凡太　知光呑夫　岸トミヱ　尻谷静林庵　川端東雲桜　松本吉太郎　岡田栄一郎　平木紅月　置田ふ志　岩田美代　上島喜八　藤岡花梢

帝化川柳会

深見雅堂　佐野白水　平松繁三　佐伯九柴　谷一平　正口辰始　谷沢好祐　中岩雄水

第百六十一回

大萬川柳

兼題「仏像」入選発表

選者　麻生路郎先生
投句総数　五百七十六句
入選　六十一句

鳥取　一保
観光団仏に尻を向けて撮り

神戸　隆史
好色の眼で立膝の仏観る

羽曳野　圭太
碧い眼の方に仏像顔が売れ

小松　芳朗
重文の仏像坊主のガイドずれ

松江　鶴丸
仏像の写しも信者ありがたく

堺　慶之助
仏像の前でチャンバラ幕を閉じ

広島　大八州
邪恋ふりきれず仏像へ眼をつむり

敷中　夢虹
仏像が京の入り陽に歩きそう

門真　鉄児
異状乾燥仏像さえもひびが入り

大阪　十六里
マンマンチャンアンと仏像拝まされ

大阪　琴女
仏像をハンサムやわという女将

富田林　美房
仏像の価値をドライは時価で聞き

大阪　市郎
本尊の見えぬ浅草拝まされ

大阪　痴亭
色即是空野仏のかげで逢い

鳥取　法皇子
仏像の塵を払えば金になり

松原　万竿
観世音動じ給わず値踏みされ

大阪　水京
仏像も有為転変の厄に遭い

富田林　東雲楼
仏像を背にスキヤキのハイティーン

奥　甦光
大きさで奈良の大仏勝負する

大阪　弘村
いつしかは土に帰するか野の仏

笠岡　忠三
仏像も寺の赤字で身を売られ

西宮　野菜
重文にならねば仏像木片なり

岡山　宗義
弁財天六人ながら気に入らず

仙台　光道
仏像をスクラップに換算して拝み

和泉　東天紅
大仏を尺貫法で見る高さ

大阪　あいき
逃げて来て仏像の眼にさとされる

赤子　雄々
国宝という仏像に網を張り

高槻　静馬
庭を見たついでに仏像拝んどき

笠岡　遠二
仏像を盗られて寺の名が知られ

泉北　好郎
ご本尊今日は茶の湯を見てご座る

笠岡　桃里
団地には緑なく移す石仏

大阪　阿茶
仏像へ科学のメスは容赦せず

大阪　晃
千年を経て仏像のみづみづし

倉敷　方大
仏像へうなずくだけのハイヒール

新居浜　桂仙
拝めとは言わず大仏あぐらかき

同
仏像を見あきて京も早や三日

布施　清人
仏像も結婚式へアルバイト

同
君と僕五百羅漢にある似顔

石川　宗太郎
仏像と裸婦が並んだ美術展

同
国宝になって仏像鼻が欠け

大阪　小松園
むし暑さここいかるがの仏たち

同
忍従を仏像の眼に教えられ

大阪　野迷路
千余年秘仏にされて日の目見ず

同
仏像の由来テープで流される

大阪　春巣
値金のカタとは仏つゆ知らず

同
大仏の煤は目方も計られる

大阪　柳志
歓喜仏またぼんのうに見つめられ

同
円空の良さ横文字に教えられ

大阪　梅里
げてものにされて仏像浮かばれず

同
地蔵尊雨露の恵みをうけて佇ち

和歌山　木魚
仏像の欲もそうてる好き者なり

同
仏像と心中しそうなことを言い

同
盗まれて行く仏像もだまっとり

五客

鳥取　法皇子
住職の眼に本尊は女体なり

羽曳野　静波
天日にさらせば仏像死んでいた

高槻　静馬
さりげのう指でマルしておわしまし

岸和田　きさ子
水の便わるく仏像焼けたまい

大阪　梅里
大仏さん一ぺん佇ってみたかろう

（人）

笠岡　桃里
壇徒へ切札仏像売ると言い

（地）

大阪　進之助
お色気は観音様も膝を立て

（天）

京都　句楽坊
仏像に堂守りさせて勤めに出

大萬川柳ベストテン（七月現在）

一　梅里　二二、五　大阪
二　桃里　九、五　笠岡
三　きさ子　八、五　岸和田
四　方大　八、〇　倉敷
五　夢虹　八、〇　豊中
六　静馬　七、五　高槻
七　章雅　七、五　大阪
八　柳志　六、五　大阪
九　晃　六、五　大阪
一〇　適二　六、五　笠岡
一一　静波　六、五　羽曳野
一二　木魚　六、五　和歌山
一三　進之助　六、五　大阪
一四　宗太郎　六、〇　石川
一五　美房　六、〇　富田林
一六　春巣　五、五　大阪
一七　句楽坊　五、五　京都
一八　阿茶　五、〇　大阪
一九　好郎　五、〇　泉北
二〇　野迷路　五、〇　大阪
以下略

次ぎの兼題「けちんぼ」五句以内
〆切　八月十日
発表　八月二十日
九月の予告「薄情」
〆切　九月十日
発表　九月二十日
投句先
大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇
大萬川柳会

いのちある句を創れ

花地柳壇

投稿規定 ▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 七月句会（大阪市）

7月6日 午後6時
会場―― 千日前 自安寺

急に暑さが加って、巷間、白一色のすがたに変わったとはいえ、句会場は扇風機陣の涼しさ、今夕も定時には既に会場は満員となり、なごやかな楽しい句会風景となった。川村好郎氏の柳話は「選者は如何にあるべきか」ということをすこぶるユーモラスに話され笑いのうちに、正しき選者の在り方をうなずかせられた。後、兼題、席題の披講に移ったが、本夕は多くの佳吟に接するを得て、本句会ならではの喜びを満喫した。最後に、路郎師は八月開催の川雑川柳ゆかた会の趣旨其他について話された。本夕の不朽洞杯の受賞は川柳のベテラン川村好郎氏の句に輝いた。閉会九時半 （摩）

出席者＝路郎、摩天郎、たつみ、圭井堂、静馬、いさむ、井平、瓢太、好郎、多久志、八郎、玲人、古方、すみれ、以兆、六竜子、市郎、文秋、句楽坊、有子、花梢、美房、清人、白溪子、柳宏子、柳志、舟遊、水京、弥生、すすむ、凡子、仲字呂、阿茶、トメ子、一栄、清子、恭太、金蔵、天樹、進之助、みさ子、あいき、白柳、庸佑、恒明、季貴、〆女、一舟、霞乃、

兼題「黒」 麻生路郎選

逆の真ネガフィルムに白黒く 旅風
幕あいて薄暗がりに黒子散る 野迷路
おすべらかし黒光りする住き日晴れ 八九寸
女なるを忘れ真黒に働き 恒明
学校を子等卒業で家計黒 句楽坊
黒服が女近寄り難う見せ 柳宏子
悲しみは黒一色に身を包み みさ子
初手合わせ先ず謙遜の黒を持ち 井平
黒い服着ても牧師とやくざあり 清子
氷年の惑が黒だと確信し すみれ
黒らしいのでなぐらずに置く刑事 白柳
その昔は黒髪賞でし頃もあり 瓢太
黒を白にする言いわけを舌の先 進之助
黒星にあせり黒星また重ね 文秋
黒眼鏡に雪駄イカレたつもりなり 静馬
黒枠の前へ特進二階級 多久志
引退を控え黒星つづきかけ 専翁
黒白を争い家裁の門くぐる 仲字呂
黒メガネ文句ありそによって来る 花梢
税務課は黒い噂に落ちつけず 玲人
黒々と染めて若さへ追いつけず 弥生
黒う黒う筆太に御祝 清子
百十番こよいもかなし黒でした 八郎
銀行へ出すバランスは黒にする 多久志
黒い雲出てるにアベック気もつかず みさ子
色黒い位い何です博士です 摩天郎
黒髪の情緒を言えば歳が知れ 恭太
黒帯になって愈々不良めき 圭井堂
汗一つ出てない黒衣の童てい尼 〆女
四十妻好みをきけば黒が好き 以兆
恋を知る頃からほくろ気にしだし 句楽坊
盛り場を斜に横切る黒メガネ 清人
四十後家という喪服のなまめかし 多久志
好きな人の色の黒さもたのもしく あいき
喪服着た悲嘆の人の楚々として 有子
黒点になっても人気見送られ たつみ
チョッピリの黒字に税吏承知せず 圭井堂
真黒になってバイトの子が戻り 柳宏子
黒わくの中に社運を見つめられ 進之助
肚ぐろと知りつつ知恵を借りにゆき 一舟
肌黒きが故の悲哀は今も尚 瓢太
黒帯はベッドの中で寝たっ切り 玲人
黒い影愛のさゝやきどこでなし 恒明
情熱を黒につゝんで「喪」に服し 〆女
あこがれて来た大阪の黒い河 好郎
大物の急死は黒のままだった 路郎

兼題「せゝらぎ」 若本多久志選

せせらぎの音も懐し故郷近し 繁太郎
せせらぎの音が脱がせてくれた靴 旅風
せせらぎと鼾と耳の右左 八九寸
せせらぎで商魂忘れた家族連れ トメ子
ハネムーンせせらぎの道もリズミカル 六竜子
せせらぎを聞きつゝ眠れぬ初夜の妻 好郎
せせらぎに浮く笹舟のように生き 一舟
せせらぎや失意の俺の一人旅 美房
せせらぎにビール冷やして歌になり 清人
せせらぎの鮎は素手でもつかめそう 玲人
せせらぎに思い出のある湯に浸り 仲字呂
せせらぎの音二人は聞いていず みさ子
せゝらぎへとんと詩情のない男 恒明
せゝらぎの真ン中にある県境い 玲人
せゝらぎへ三々五々の貸浴衣 恒明
せせらぎで河鹿を知らぬ無風流 金蔵
寡果ててからせせらぎの音を知り 文秋
せせらぎに夢誘われる旅の窓 天樹
せせらぎを枕に老人一人住み いさむ
せせらぎの河鹿都会を忘れさせ 庸佑
せせらぎへ足の白さを浸けてみる 美房
せせらぎの音も入れたいシャッター切り 好郎
せせらぎの竿気の毒な程釣れず 庸佑
せせらぎへ女女の声を出し 宗義
めし炊けた声せせらぎにはね返り 清人
ビールの空缶せせらぎが泣いている 白柳
せせらぎの音聞いている膝枕 痴亭
所在なくせゝらぎで小用して了い 金蔵
せせらぎに片脚つけて病みあがり 圭井堂
せせらぎの向こうでてらすマイダーリン 宗義
せせらぎの上まで茶屋の所有権 恭太

兼題「肌」 八木摩天郎選

汗しぼるほどに抱きしむ夏の肌 どんたく
肌の色うっとり見つめる湯があふれ 宗義
献血へただひたむきな肌あらわ 八九寸
母の肌しなびた乳房ついて居り 句念坊
肌あいの相違で緑談とゝのはず 野迷路
恋知らぬ女の肌の冷たさよ すみれ
ギリギリの線まで水着肌を見せ 文秋
撤廃論ぐらいで解けぬ肌の色 好郎
やや肌の白さ男の瞳を意識 柳宏子
女子大出ベビー肌着も既製品 あいき
母として女としての強い肌 舟遊
書留へ芸者の素肌見てしまい 市郎
療養の目にたくましい漁夫の肌 好郎
肌見せた時からパトロン下り坂 みさ子
電光へ錦絵の肌冨士錦 金蔵
通勤車女の肌が気にかゝり 瓢太
肌色に区別自由をさけぶ国 進之助
灸のあとだらけ色気も失せた肌 文秋
チリメンの様なお肌に美顔術 花梢
親分肌いやと云えぬを見抜かれる 恒明

塗りつぶし地肌哀しい楽屋の灯　六竜子
肌ざわり良くて窓口二十年　市郎
もろ肌を脱いで長びく若づくり　弥生
けがらわし肌のうつりが洗うシャワー　句楽坊
肌の色違う人から血を貰い　玲人
湯上がりの肌に見つけた妻の歳　圭井堂
肌見せて流行と云うニューモード　いさむ
世に拗ねた尼僧の肌のきれいすぎ　一栄
並ぶ肌ふれて二人の堅くいる　すゝむ
何よりの手掛り肌にアザある子　以兆
肌撫で合って夜の女のかこつ年令　六竜子
断層の地肌歴史の香を秘めて　天樹
あれ肌の女将は金にすがるだけ　専翁
持ち馴れぬ大金肌につけてゆき　みさ子
肌に合うとこは矢っぱり釜ケ崎　圭井堂
銀婚の妻やわ肌にほど遠く　多久志
山険わし六根清浄肌の汗　清人
汗臭いラッシュアワーの肌と肌　八郎
悪人の不幸にひと肌脱ぐやせっぽ　いさむ
お守りを肌身につけて山へやり　文秋
夜の蝶肌は冷めたき生まれつき　恭太
はち切れる肌をレンズにのぞかされ　市郎
肌見せぬとこに魅力のある女　すみれ
肌ゆるす気持ちはないが好きな人　一舟
肌合いがちがうコンビのいきが合い　すゝむ
夏夜具の越後縮の肌ざわり　阿茶
ええ肌やないのと再婚奨められ　玲人
金にものいわせたデムの肌を持ち　舟遊
美しい肌にベタベタサロンパス　以兆
今日限り処女の肌に散る湯玉　美房
母の遺品肌身離さずマスコット　進之助
肌の竜孫にはあとを継がすまい　恭太
堕ちるだけおちて素肌で女生き　清子
関取の肌も知ってる芸者も居　摩天郎

兼題「ベストセラー」　戸田古方選

ベストセラー唯それだけで塵かぶる　野迷路
内職に書いて出したらベストセラー　宗義
舌打ちも出来すベストセラー拍手する　みさ子
ベストセラーにもれて推選図書になり　文秋
好かん本ばかりベストセラーになり　多久志
ベストセラー弟子に書かせたのもまじり　恒明
週刊誌仕込みのベストセラー評　柳宏子
貸本屋ベストセラーを棚で貼り　恭太
うくでないベストセラーと云いながら　圭井堂
ベストセラーばかりを読んで世に疎く　仲字否
ベストセラー適当にセッス書いてあり　水京
ベストセラー話の種に買うてみる　どんたく
ベストセラーその後は何も書けぬよう　阿茶
ベストセラー追うて本屋もくたびれる　文秋
立ち読みベストセラーが売れていた　たつみ
ベストセラーの中クイバルの名をみつけ　進之助
ベストセラー映画化されて知れわたり　白溪子
ベストセラーアクセサリーのように持ち　たつみ
ベンダコはベストセラーへ夢を持ち　市郎
ベストセラー読みもせずベストセラーを集めてい　みさ子
赤裸々に女・女を書けば売れ　美房
ベストセラーやっぱり種のある話　市郎
ベストセラー読むが時代にづれて居り　一舟
ベストセラーモデルは無いと付け加え　玲人
ベストセラーばあさんコンビ好きになり　静馬
ベストセラーになって作家の道をそれ　柳宏子
ベストセラー間おも読めと買うてくる　美房
ベストセラーそれから妻の座をにげれ　舟遊
ベストセラー完結篇で胸を痛み　いさむ
ベストセラーであった色あせている書棚　古方

席題「議員」　吉田圭井堂選

議員章つけて公約もう忘れ　みさ子
元議員奮気一番返えり咲き　いさむ
再出馬ねらうか議員の小まめなる　好郎
お手盛りへ満場一致の超党派　進之助
議員ずれ赤坂通いも板につき　みさ子
顧問格議員揃える如才なさ　青佑
金とひま出来て市議でも出たくなり　文秋
イエスノーだけで議員の視察団　進之助
議員歴終始野党の側で終え　白溪子
リヤカーを押して村会議員なり　白柳
町会が通れば市議の野望もち　金蔵
親分の無学へ市議のうしろ立て　清人
下駄履いてジャンパーで来る村議さん　多久志
世話好きが議員に出たい下心　文秋
一等車議員バッジが愛想よし　恭太
商売は奥さんまかせの町議さん　多久志
居眠ってヤジっていても議員なり　清子
正論を吐いて議席の隅に居る　静馬
秘書の出す名刺の順で会う議員　圭井堂

席題「抵抗」　河相すすむ選

お姉チャンの味方ばかりと抵抗期　花梢
愛情をたしかめ女ダダもこね　水京
焼けつく舗道へ撒水車の抵抗　玲人
注射針子の抵抗は無視せられ　白溪子
妻無言何を云っても返事せず　すみれ
抵抗に生き甲斐がある平社員　恭太
損だとは承知課長へ楯をつき　進之助
抵抗を善意に見ている太っ肚　恒明
十代の抵抗真一文字に結ぶ口　市郎
女の抵抗だまってすねて泣いただけ　井平
腕角力子の抵抗をうれしがり　柳志
意地捨ててから人生の無抵抗　たつみ
別室に来て抵抗が薄れて来　いさむ
肌に墨入れて少年世に抗す　六竜子
金の要る話に抵抗やめにする　静馬
せめてもの抵抗箸をかみくだき　六竜子
さかろうて見たが女と云う悟り　柳志
美しい抵抗服を買い漁る　玲人

席題「豪雨」　金井文秋選

水深へ豪雨不安の目を集め　天樹
雨乞いを今更悔やむ程の雨　圭井堂
雨漏りと壁を落として豪雨去る　みち子
近県の豪雨の余りがほしい空　いさむ
豪雨にも耐えて生き抜く船世帯　市郎
日本の広さテレビで見た豪雨　たつみ
洪水の半鐘へ位牌しかと抱く　圭井堂
日本をズタズタにして豪雨去り　恭太
豪雨はや月賦住宅から荒し　好郎
男性的か知らんが豪雨暴れすぎ　柳宏子
国鉄のダイヤ狂わす二百粍　進之助
川上の豪雨ヘメガホンとんで来る　圭井堂
子ばつのあげくへ無精豪雨来る　多久志
人間の試練へ豪雨まだつゞき　多久志
豪雨一掃風鈴に初夏の風　舟遊
豪雨禍はお池の金魚があぶれ出し　静馬
豪雨もう家賃の安い屋根がもり　柳志
何くそと豪雨を馳けて風邪を引き　静馬
造成地豪雨は企画に入れとらず　清人
一〇〇ミリの雨に市政のクラが見え　柳志

雑川　**阿倍野支部句会**（大阪市）
金井文秋報

投句に選句に便利な
川柳雑誌社特製
投句用　**柳箋**
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料（一冊分）二〇円

里帰り甘える母にある匂い　柳志
もう厄介になる先ないから帰って来　静馬
殺し屋を雇うた気持ちわかる記事　一舟
国なまり磯の匂いの中で聞き　梅里
パン食へおなかの方が慣れてくる　文秋
厄介をかけた昔に触れぬ客　玲人
引抜きへ用意の席が気に入らず　柳宏子
結納貰うてから女の事がばれ　清子
厄介なことに年子になりそうな　一栄
でたらめを云うて一度は成功し　金三
ケンタイ期どつちがほれたともめている　恒明
惚れ過ぎて婦唱夫随になつちまい　痴亭
用意した言葉が出ない祝膳　凡子
習慣も父親に似て来た君も齢　幸雅
今日の垢匂う銭湯にも人生図　滋雀
厄介な頼みへ妻の眼が険し　鉄児
ほのかな匂いふり向く目と出合い　白柳
だんだんと家風じみてきた茶碗　雄峯
習慣になるそとあぐらの娘を叱り　井平
道づれが出来て用意のポケットビン　弥生
不用意の発言逆に突っこまれ　半月
警察犬思わぬ方から匂うて来　嘉代子
厄介者また一人ふえ座が白け　東天紅
竿立てて待つ鯉のぼりまだくれず　珠笑
用意出来てから山登り母に告げ　あいき
厄介なすり餌の小鳥預けられ　阿茶
厄介になるぜと上がる務所帰り　圭井堂
厄介なことだけ長男もちこまれ　一三夫
うつかりと辞めた会社へ足が向き　宗義
弁の達つ日雇いが来る市長室　市郎
用意した金で入学足を出し　庸佑

雑川　玉造支部句会（大阪市）

西出一栄報

大巾に歩く飯屋に借りがあり　梅里
ぼやかれた家計へそくりで埋め合わせ　滋雀
何もせんのが一番ようぼやき　柳宏子
ぼやくだけぼやいた寝顔には見えず　凡子
ボートワインガラスは注いだ色を見せ　文蝶
ガラス破る音で逃げ出すホームラン　柳志
ガラス箱小さき命生きんとす　文秋
金魚鉢同じ動きをくりかえし　清子
もう少し見ていたいのをスリガラス　小松園
熱っぽい子の唇にママ慌て　半月
熱烈なうちにダイヤを買わせとき　痴亭
熱っぽいムードノックに冷やされる　章雅
美人になりたいドライヤの熱に耐え　一栄
口あけた寝顔へ惚れた熱も冷め　井平
熱とれてミミズのまぜたことも云い　あいき
知恵熱にしといた事が仇となり　一舟
熱の子へえらい約束してしまい　市郎
討論につかみかからん程の熱　白柳
商売となれば市バスも出稼ぎす　東天紅
郊外へのびる団地へ市営バス　六竜子
ノロノロの市バスを怒鳴るダンプカー　玲人
おんぼろのバスが市政をののしかせる　静馬

雑川　京都支部句会（京都市）

田中烏雀報

手の早い児が容疑者にされてゐる　亀一
容疑者と思わず低い鼻をもち　尚平
巻ずしの太き手製といわずとも　幸男
家内中の名をかき手製のポスト出来　烏雀
ふとんのかばあになつていた和服　ゆきら
園児の顔拭いてやつてるのが一年生で兄弟　白史
原則と平和は崩れるためにある　礫
お地蔵さんが割れて笑うたままである　司郎
カーバイトの灯が消えた所場割の争　禎一
孤独ひび割れドンキホーテの盾がある　枯粒

雑川　出雲支部句会（出雲市）

尼緑之助報

まな板の鯉は覚悟の眼を開き　晃男
鯉のぼり隣の家根でまた泳ぎ　李朋
溝掃除して隣保の美化運動　祥月
掃除する耳へ小さくあまえてい　河南
一流の腕があるのにへそ曲り　やすを
大掃除すんで一と風呂安来節　松風
少年の家出悪への曲り角　雅行
大掃除役に立たない夫です　壮
共産党にもへそ曲りが居て白票　章峯
招待へ義歯掃除して出かけ　独仙
ふるさとのにおいむせて曲る道　緑之助

雑川　大聖寺支部句会（加賀市）

野村味平報

女房と兼用でよい折畳　味平
傘いらぬきままの子供に俄雨　平凡
なにかもの足らぬは傘を忘れてき　雅城
ほんとうに破れ傘借りもてあまし　魯木
濡れ傘を一太刀あびせるように振り　光郎
腕白のうぢにやいと煙あげ　併呑
口開けただけで痛いと子は歯医者　久雄
酒呑めば呑んで破れた胸痛み　酔羊
株みんな身内で持って会社無事　一路

雑川　ハワイ支部句会（ハワイ）

築山快夢起報

薬学の進歩病に平行し　静杉
古稀の寡医者も薬もまだ他人　美舟
薬湯でふやけて帰る老夫婦　浅太
薬屋の破算したのが腑に落ちず　拝山
新薬の広告闘病見逃さず　柳葉
薬の名舌のまわらぬのが売れる　快夢起
窓あけて一望千里俺のもの　万里歩
腰をすえゆっくり呑む気の窓をあけ　内海
汽車の窓電信柱ひったくり　斧平
百薬の長と勝手な理屈つけ　紅溪
窓明いてお叱りうける猫の恋　平八郎
ショウウインドまでよと妻の口に乗り　峯園
女中部屋言訳だけの小さい窓　暁舟
名月の窓へ二人の手を重ね　三石
窓開けて男の匂消すつもり　魔花麗
陽にそむく窓八十度開けときな　雪女
離れゆく里の名残を汽車の窓　泉水
どの窓も閉めたまんまで妻の留守　あき坊

雑川　岡山支部句会（岡山市）

浜田久米雄報

サイレンがやっと自分の身に返し　宗義
月曜のサイレンいやに早う鳴り　七坂
ゆき詰まる捜査へサイレンせきたてる　譲士
サイレンへ不吉な予感が的中し　佐加恵
サイレンへまたかと街の目が愛い　三平
サイレンの白バイ前に来て止まり　照路

食品と原資材機械包装の総合誌
食品と科学
Food Science
本社　大阪市北区源蔵町5 (361)9373代
支局　東京都千代田区神田鍛冶町2 (291)9629代
名古屋市昭和区村田町2 (88)9069

サイレンが鳴らずそばまで来て止り　鮫虎狼
サイレンが鳴らず工場にビケを張り　鈴ん坊
救急車のサイレン無事を祈るのみ　哲郎
犯人を逃がすサイレンかも知れず　秋月
サイレンがここへはとどかぬ炭をやく　賤女
サイレンが終らぬ前に椅子を立ち　弥寿子
サイレンを待つネクタイをしめ直し　久米雄

雑川　土佐支部句会（高知市）

川竹松風報

子を叱る短気を母に叱られる　寛
叱られた母のお蔭をインタビュー　博理
うけとりのにぶさ師匠に叱られる　蟠蛇
叱られてちり箱探すあわてよう　夢生
内職の向こうで明るい子等の声　窓花
内職へ拍車がかかる十二月　福美
花便り聞くだけにして手内職　百日紅
内職の母へせめても熱いお茶　嘉子
雲行きへ明日のプランを二つにし　古城
人生のそれにも似てる四季の雲　天花
旅人の脚を止めた鰯雲　俊一郎
流したり揉んだり混浴の老夫婦　勝子
現実が来てまた夢を持ってゆく　紅雨
戯れる猫まで叱る農繁期　呑洋
読めぬ軸なんとか流の花と添い　康之介
金策へ子供病気にしてしまい　松風
雨の日を楽しむ人の生活向き　山里

大阪逓信病院川柳会（大阪市）

青葉吟行　森下愛論報

別嬪の方にチップを渡して来　春雄
妻だけが男心に泣いてくれ　没食子
色っぽい妻の目付が気にかゝり　カネ女
お土産は女の歳をいって買　竹荘
お土産も買わずじまいに旅に出る　史葉
新婚を訪ずねて土産出しそびれ　愛論
土産物がアリバイになってくれ　山石
ロケーション城のまわりの人だかり　まさる
城下町に生まれお城でデイトする　春栄
苔むした城壁何を物語る　露児
肩ごしにワンダフルが流れて来　草右
石庭の心外人として愛し　宏子
外人といわず異人さんと祖母は云う　かをり

あすなろ川柳会（大阪市）

山本素郎報

親指を出して居るかと借るつもり　梅里
石段を登る如しと意見され　景達
飛入りにお台所は大あわて　万利
石段を年や年やと後になり　弓彦
ああでもないこうでもないと独り言　慶之助
独り言きいて電車の席が空き　百酒
わがままがもう顔みせるハネムーン　幸児
飛入りで人気をうばう孫の声　酔宗
わがまゝを親ゆずりだとふてくされ　尤三
わがまゝやないと自分に云いきかせ　福郎
クツを云うだけに手真似に念が要り　ゆきを
泣けるだけ泣かせもしろう腕の幅　素郎

南海電鉄川柳会（大阪市）

辻圭水報

白バイをバックミラーに観念す　句念坊
白バイを欲しがる娘へ心配し　和郎
白バイがおるので迂回すると決め　圭水
白バイに追い掛けられて起きた事故　烏荘
白バイが見れば安心できぬ腕　圭水
白バイに駄々けたあの子も今はパパ　和郎
白バイに役目のつらいこともあり　烏荘
箒持ったままで白バイを追う子にて　専翁
白バイの警笛都市の風物詩　専翁
白バイにたたかれ様とも二十才　八郎
白バイはいまい助手席交代し　烏荘
白バイも道路の悪さ知っており　圭水
白バイの捕らえて見れば旧主人　句念坊
白バイへ雨は斜線の如くふり　路郎

富柳会句報（富田林市）

阿部柳太報

期待したはなしつぶれた初仲人　重子
マイナスはお手づだいさんがきれい過ぎ　美代
悪銭につられて命まで落とし　半月
夜の非行悪銭らしい使いぶり　六竜子
悪銭と知りつゝ二号よくしぼり　吉太郎
金に不自由せんと云うてこの仕末　摩天郎
内助とはへそくりの旨い妻のこと　来更来
奥さんが出来てるからと噂され　すみれ
つきはぎの暮し今日も笑顔にある内助　花梢
立ち上がる支えに妻がいてくれる　清子
約束に雨でもうれしく若い者　林松
約束をしてから女らしくなり　美房
約束へ空家と知らず月賦来る　柳太
冷汗がやせたあばらをはい廻り　きはち
恋人がいるのにポリに注意され　清子
行商のお国訛もとりまぜて　達男
先頭に立ってふれふれ万国旗　多加子
A君と訛でわかる電話口　蒼水
先頭を走る夫に声をかけ　道子
鬼刑事なまりで星を見逃さず　すが子
先頭にいたで部長ににらまれる　芳道
先頭に立てばきびしい風当り　多可志
廻れ右した先頭で卒業し　日満

コクヨ川柳会（大阪市）

川口理休報

逆転を又逆転を願うファン　理休
銀婚のようよう移り気衰えてルミ
移り気のころなつかしき子持ちなり　ほたる
世話ずきのようで打算が入っとり　留鈍
世話ずきの仮面かぶった選挙前　一生
世話ずきへ辞わる方の根がいり　ほたる
ビルの谷間怪談よりもおそろしく　広彦
深夜の鉄路無数のうめき声　武
怪談で儲けた師匠益に死に　ほたる

宴会・出張パーティ・折詰弁当
梅里ノ店
大萬
料亭　阿倍野区松崎町三ノ一〇　TEL（六三）三九三五番
鮨の店　アベノ橋近映地下食通街　TEL（六三）〇一四七番
串の店　南区瓦屋町三ツ寺センター　TEL（三二）九一八四番

河村日満報

柳樽室

路郎生

★山陰豪雨禍お見舞—ことしの梅雨はダラシのないツユだったが、後半で山陰地方へ集中豪雨、あっちこっちで水禍の惨、全くお手挙げの外はなかった。我等は新聞を手にして、ただただ柳人諸氏の上に少しでも被害の尠ないことを祈るばかりでした。

★出雲市の山間部では山くずれで悲惨な話ばかりだそうだが、野村岬月氏の宅は床下浸水、緑之助、独仙、晃男の諸氏等は水の洗礼位で済んだとは言え一時は驚かれたこととと遙にお見舞申し上げる。

★木次の明朗氏の方はどうかと案じていたが無事で、川雑川柳ゆかた会には来阪するとのことなので我がことのように安堵した。

★松江市の方は孤呂二氏をはじめ、冬児氏、与根一等いずれも無事、鶴丸氏も全然水の被害がなかった由で「水害地照らす憎らしい太陽が」の句を寄せられた。

★前号は遅刊を八日取り戻したので好評だったが、記事編輯で、ムリに発表したものの中には読みずらいのもあって、恐縮した。本号はその点やや緩和された。

★本号は特集—無季俳句をどう思うかで各地のエキスパートから卓越した意見をいただいたし、冨士野鞍馬氏から古俳句と古川柳の続稿「芭蕉庵桃青」の寄稿があり、東野大八氏からは「芭蕉ざれ言」が寄せられ期せずして俳句と川柳の対決号の観を呈した。ご愛読を願いたい。

★軽い読物としては東都の塚越迷亭氏から「高須啞三味氏を語る」を寄稿されたし、古句研究としては川傍柳初簞研究の（十七）連載されいよいよ興趣を増んでいる。

★拙稿川柳「名句抄の鑑賞」は例によって弘く大衆に川柳を理解して貰うために稿を続けた。

★前号で、七月には我等夫妻が信州方面へ出掛けるように発表したが、あまり多忙で、信州どころかどこへも行けなかった。この調子では当分針付けであろう。

★川柳不朽洞会が世話役となって、喜寿金婚のお祝賀金を贈られた方々に、小生の揮毫作品をお渡しするようとのことになったので、感激を深くしている。いかに忙しかろうとも、この作品ばかりは柳友諸氏のご厚意に酬いるためにも、ウンと力作を念願している。

★七月二十三日午前一時五分に名物男の土井文蟬君が、他界した。何れ次号で詳しい記事を掲載するが、惜しい男を亡くしたことをお知らせしておく。

★川雑川柳ゆかた会はなかなか好評だ。冷房のある会場で、肩の凝らぬ催しがうけたのであろう。時節柄健康第一で、川柳への精進をお願いする。

★川雑支部八月句会

★玉造句会・10日（月）六時半、題、ねばる・事故・前夜、所、市電玉造南百米大阪信用金庫、**★阿倍野句会**・20日（木）六時半、題、下町・底力・腹芸・甘い、所、市バスアベノ筋八丁目下車東五〇米菊沢小松園居、**★明知研究句会**・16日（日）一時、題、船・花火・益、所、阪神電鉄鳴尾駅下車東南二百米鳴尾公民館、**★京都句会**・16日（日）夕、題、薬局・俗物・うどん、所、四条縄手仲源寺、**★南海電鉄句会**・27日（木）六時、題、歩行者・とばっちり・改善、所、難波高架下親和クラブ、**★かがみ句会**・2日（日）十時、題、てれる・ハンザキ・からくり・血筋・面会、所、岡山県真庭郡湯原町国民宿舎桃李荘

9月本社句会予告

老木　命日　月光　東縛　〃兼題〃

すます上げし申舞見御中暑

川柳雑誌社

編集局
麻生路郎　麻生葭乃　北川春巣　河野春三　戸田古方　清水白柳　真鍋一瓢　橘高薫風子　浅川八郎

句会部
菊田いさむ　西田柳宏子

総務部
八木摩天郎　林宏子

麻生路郎著　好評噴々

川柳の味わい方・五百数十句

（毎日新聞評）麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう六十余年にもなる。この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁重な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

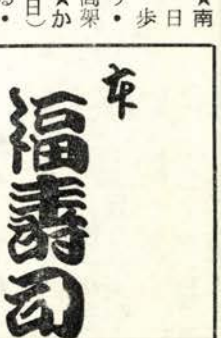
価二五〇円　送費八〇円　B6版　二五〇余頁

発行所　川柳雑誌社　大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地　電話大阪（671）六〇八一　振替口座　大阪　七五〇五〇

御礼

七月十九日の七周年記念・還暦祝賀句会には各位の多大のご支援ご来会を戴きありがとう存じました。

明和川柳研究会
甲南川柳教室　一同
河相すすむ



心斎橋筋大丸前
電話（271）三三四四番

大和文華館

日本建築の特色に近代美をいかした建物で絵画・彫刻・書蹟・陶磁漆工・染織など　国宝や重要文化財をふくむ逸品を集めた　すばらしい美術館です

春秋には　特別展観が開かれます

近鉄上本町から奈良ゆき急行28分　京都から奈良ゆき特急30分　西大寺駅のりかえ5分　学園前駅すぐ

大阪
戎橋

北極星 直営営業所

戎橋	北極星	(6)〇七
白浜温泉	やわらぎ	白浜温泉 三一六七
大正橋	やわらぎ	(36)一六八
永楽橋	やわらぎ	(36)七一六六
野田阪神	やわらぎ	(46)六四一
野田阪神	バンヤの食堂	(46)一四五六
くまた町	バンヤの食堂	(71)九三五

ドイツ・マック社製
強力 ローヤル・ゼリー 製剤

活力を高める アピ

強精と長生への天然の強壮効果

日本新薬株式会社

正式名 アピフォルティール

会長・麻生霞乃女史

川雑 **婦人友の会会員を募る**

川柳雑誌社内 川雑婦人友の会

入会希望者は往復はがきで……

連絡事務所　大阪市南区二ツ井戸町23

山川阿茶

募集

課題吟募集

セールスマン（十句以内）大鶴喜山選
地図（十句以内）杉谷湖山選
緑（十句以内）早川清生選
さぼる（十句以内）市場浸食子選
空地（十句以内）水松東帚選
楽屋（十句以内）森下愛論選
（八月十五日締切）
（九月十五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）麻生路郎選
人生譜（雑詠十句以内）北川春巣選
川柳塔（雑詠十句以内）河野春三選
文章（評論・研究・感想其他）麻生路郎選
（一月十五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。

▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。

▼「課題吟」「人生譜」は誰でも投句が出来る。

▼「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

B列5号　毎月一回一日発行

川柳雑誌　三十九年 第八号

定価　一二〇円（送料六円）

（禁転載）

半カ年　七五六円（〒　共）
一カ年一、四四〇円（〒　社負担）

昭和三十九年七月廿五日印刷
昭和三十九年八月一日発行

大阪市住吉区内代西五丁目二五番地
編集兼発行人　麻生幸二郎

大阪市住吉区内代西五丁目二五番地
印刷人

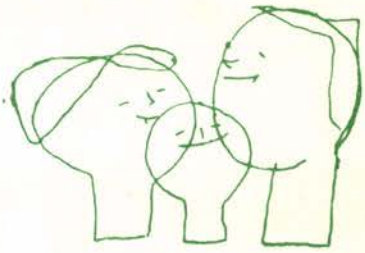
発行所　**川柳雑誌社**
電話大阪(671)六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番

Printed in Japan

昭和廿二年七月一日　第三種郵便物認可
昭和卅九年八月一日発行　（毎月一回一日発行）
編集兼発行印刷人　麻生孝二郎
発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区内方代西五丁目二五番地　電話大阪（671）〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番
定価百二十円（送料六円）

国立公園　奥新和歌浦・雑賀崎
風光明媚な海岸美を誇る
国際観光旅館
うおまたろ
魚又楼
TEL 和歌山④ 0431・0387

一家そろつてホーライ党



廣東料理 豚饅 燒売
蓬莱
大阪なんば・TEL (641) 551－2

リキもってこい！

だるい・精力が衰えた・すぐ疲れる・肌に若さがない・こんな時とくにリキの効果は見のがせません　リキホルモは高単位男女両性ホルモン　強精強心成分　天然ジャコウ牛黄のほか綜合ビタミン11種強肝剤6種を美しい新型ユニットカプセルに収めた強力な薬です

疲労回復・体力増進・精力増強に
リキホルモ
小野薬品
●12カプセル・30カプセル（各携帯容器付）6カプセル・32カプセル

皮ふ病の中で一ばん多い
湿疹
くさ・ただれ・あせも

★カユミをすぐとり、掻くのを忘れるほどです。
★慢性・頑固症にもよく効きます
★カブれず、ベトつかず、クリーム状で爽快です

ゼム-A
山之内
東京・大阪　山之内製薬株式会社　福岡・札幌